

**山久保 A 遺跡・山久保 B 遺跡
蔵園遺跡・中迫遺跡
西中畑遺跡・小迫遺跡**

——県営特殊農地保全整備事業(樽野・平原地区)
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

1986. 3

鹿児島県曾於郡志布志町教育委員会

序にかえて

本町における埋蔵文化財の発掘調査は、昭和49年度の宮ノ前遺跡発掘調査報告書を第1号として、今回で第11号の報告書になりますが、この他にも遺跡の発掘調査や確認調査等を行っており、報告書等も刊行されています。

今回の発掘調査は、安楽川流域に相当する樽野・平原地区の県営特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財の確認調査を行ったもので、当該地に山久保A・B・蔵園・中迫・西中畑・小迫の各周知の遺跡が存在していることが確認されました。

このように埋蔵文化財の保護は、その数が膨大で土地利用等と密接な関係にあり、最近における土地開発の急激な進展に対処するなどの適正な保護が必要で、事前の分布調査や包蔵地調査、緊急発掘調査などが今後、規模も数も増大していくことが考えられるので、出土考古資料とともに記録・保存を適確に行い将来の学術研究等に支障のないよう、また歴史的環境の保持、特に生きた過去の存在を示す埋蔵文化財の保護をはかることが最も重要な課題のひとつであります。

今回の調査及び報告書刊行にあたり、調査員をはじめ指導者・作業協力者及び協力をいただいた土地所有者、行政機関の方々に心から敬意を表し深甚から謝意を申し上げます。また、この報告書が更に文化財の保護と学術研究などに広く活用されるようお願い申し上げます。

昭和61年3月

志布志町教育委員会

例 言

1. 本報告書は、志布志町教育委員会が、国及び県の助成を得て、昭和60年度に実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、県営特殊農地保全整備事業（樽野・平原地区）に伴う事前調査として実施した。
3. 本書の執筆は、中崎勝洋、井ノ上秀文、米元史郎が担当した。
4. 本書に用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
5. 挿図番号は各遺跡を通じて一連番号とし、遺物は、各遺跡ごとに番号を付した。

本文目次

序文	
例言	
第 I 章 調査の経過	1
第 1 節 調査に至るまでの経過	1
第 2 節 調査の組織	1
第 3 節 調査の経過と概要	1
第 II 章 遺跡の位置・環境および周辺遺跡	3
第 III 章 各遺跡の調査	
山久保 A 遺跡	9
山久保 B 遺跡	15
蔵園遺跡	21
中迫遺跡	27
西中畑遺跡	31
小迫遺跡	37
あとがき	

挿図目次

第 1 図 周辺の遺跡	5～6	第 13 図 倉園遺跡位置図	21
第 2 図 山久保 A 遺跡位置図	9	第 14 図 トレンチ配置図	22
第 3 図 トレンチ配置図	10	第 15 図 1 トレンチ土層断面・ 遺物出土分布図	23
第 4 図 1・2 トレンチ土層断面・ 遺物出土分布図	11	第 16 図 3・4 トレンチ土層断面 遺物出土分布図	24
第 5 図 5・6 トレンチ土層断面・ 遺物出土分布図	12	第 17 図 5・7 トレンチ土層断面図	25
第 6 図 出土土器実測図(1)	13	第 18 図 出土土器実測図	25
第 7 図 出土土器実測図(2)	14	第 19 図 出土土器実測図	25
第 8 図 山久保 B 遺跡位置図	15	第 20 図 中迫遺跡位置図	27
第 9 図 トレンチ配置図	16	第 21 図 トレンチ配置図	28
第 10 図 1・4・6 トレンチ土層断面・ 遺物出土分布図	17	第 22 図 1 トレンチ土層断面図	29
第 11 図 8 トレンチ土層断面・ 遺物出土分布図	18	第 23 図 西中畑遺跡位置図	31
第 12 図 出土・遺物実測図	18	第 24 図 トレンチ配置図	32
		第 25 図 1・3～5 トレンチ土層断面図	33
		第 26 図 8 トレンチ土層断面・ 遺構・遺物分布図	34

第27図	出土土器実測図	35	第33図	出土土器実測図(1)	40
第28図	出土石器実測図	35	第34図	出土土器実測図(2)	42
第29図	9トレンチ土層断面図	35	第35図	出土土器実測図(3)	44
第30図	小迫遺跡位置図	37	第36図	出土石鏃実測図	44
第31図	トレンチ配置図	38	第37図	出土石器実測図	44
第32図	1～3トレンチ土層断面図				
	遺物出土分布図	39			

目 次

表1	周辺の主な遺跡一覧表	7～8
----	------------	-----

図 版 目 次

図版1	山久保A遺跡近景・1トレンチ土層断面	47
図版2	1トレンチ遺物出土状況・6トレンチ土層断面	48
図版3	出土土器	49
図版4	山久保B遺跡近景・1トレンチ土層断面	50
図版5	4トレンチ土層断面・6トレンチ土層断面	51
図版6	8トレンチ土層断面・出土土器	52
図版7	蔵園遺跡近景・7トレンチより山久保B遺跡を望む	53
図版8	1トレンチ土層断面・4トレンチ土層断面	54
図版9	5トレンチ土層断面・出土土器・石器	55
図版10	中迫遺跡遠景・1トレンチ土層断面	56
図版11	西中畑遺跡遠景・発掘風景	57
図版12	1トレンチ土層断面・3トレンチ土層断面	58
図版13	4トレンチ土層断面・5トレンチ土層断面	59
図版14	8トレンチ土層断面・8トレンチ土器・集石出土状況	60
図版15	8トレンチ集石出土状況・出土土器・石器	61
図版16	小迫遺跡遠景・小迫遺跡近景	62
図版17	1トレンチ土層断面・2トレンチ土層断面	63
図版18	2トレンチ遺物出土状況・3トレンチ土層断面	64
図版19	4トレンチ土層断面・1トレンチ石器出土状況	65
図版20	出土土器	66
図版21	出土土器・石器	67

第Ⅰ章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

鹿児島県は、曾於郡志布志町樽野・平原地区において、県営特殊農地保全整備事業（樽野・平原地区）を計画したところ、当該地域に山久保A遺跡、山久保B遺跡、蔵園遺跡、中迫遺跡、西中畑遺跡、小迫遺跡の周知の遺跡が存在していることが判明した。

そこで鹿児島県農政部農地整備課（大隅耕地事務所）は、鹿児島県教育委員会文化課、志布志町教育委員会と協議し、埋蔵文化財の保護と活用と事業の調整を図るため、昭和60年度に、国及び県の助成を得て、志布志町教育委員会が調査主体者となり、発掘調査を実施することとなった。

発掘調査及び調査報告書の作成を鹿児島県教育委員会文化課に依頼し、昭和60年10月28日から12月4日まで実施し、その後整理、報告書作成作業を行った。

なお、事業区の関係で遺跡名は上記の6遺跡とした。

第2節 調査の組織

調査主体者 志布志町教育委員会

調査責任者 志布志町教育委員会 教 育 長 川之上 俊 一

〃 社会教育課長 山 角 利 行

〃 社会教育課長補佐 那加野 久 廣

〃 文化係 主 査 畦 地 正 昭

〃 〃 主 事 東 迫 光 博

〃 〃 主 事 米 元 史 郎

調査担当者 鹿児島県教育委員会文化課 文化財研究員 戸 崎 勝 洋

〃 主 事 井ノ上 秀 文

なお、調査企画において、県教育委員会文化課長桑原一廣、同補佐坂口肇、同主幹中村文夫同主任文化財研究員向山勝貞、同管理係長寺園晃の各氏のほか、同管理係の指導、助言を得た。

発掘調査中は、志布志町文化財保護審議会委員瀬戸口望氏の協力を得た。

出土遺物については、鹿児島県考古学会会長河口貞徳氏の指導、助言を得た。

第3節 調査の経過と概要

発掘調査は、昭和60年10月28日から12月4日まで実施した。その間の調査の経過と概要については、日誌抄をもってかえる。

10月28日(月) 発掘調査開始。山久保 B遺跡1～5トレンチ設定し掘下げ。

10月29日(火) 1～5トレンチ掘下げ。出土遺物なし。

10月30日(水) 1～5トレンチ掘下げ完了。6・7トレンチ掘下げ、1～3トレンチ土層写真撮影、蔵園遺跡1トレンチ設定、掘下げ。

- 10月31日(木) 山久保A遺跡1, 2, 3トレンチ掘下げ, 3トレンチより縄文晩期土器出土。
- 11月1日(金) 3・4トレンチ掘下げ。山久保B遺跡, 土層断面実測。
- 11月5日(火) 山久保B遺跡6, 7トレンチ掘下げ。山久保A遺跡3, 4トレンチ掘下げののち, 遺物実測。取上げ。
- 11月6日(木) 山久保A遺跡3~5トレンチ掘下げ完了。土層写真撮影及び土層断面実測。
- 11月7日(木) 山久保A遺跡6, 7トレンチ掘下げ。中迫遺跡1~3トレンチ掘下げ, 1トレンチより縄文晩期土器出土。山久保A遺跡土層断面実測。
- 11月8日(金) 山久保A遺跡1~5トレンチ掘下げ。
- 11月11日(月) 山久保A遺跡2~5トレンチ完掘。2トレンチより土器片出土。
- 11月12日(火) 山久保A遺跡土層断面実測。
- 11月13日(水) 山久保A遺跡土層断面実測。出土遺物実測ののち取上げ。
- 11月14日(木) 山久保A遺跡各トレンチ埋戻し。
- 11月15日(金) 中迫遺跡1, 2トレンチ設定し掘下げ。西中畑遺跡1, 2トレンチ設定し掘下げ。
- 11月18日(月) 中迫遺跡, シラスまで完掘。出土遺構, 遺物なし。西中畑遺跡1, 2トレンチ完掘。遺構, 遺物なし。西中畑遺跡3~6トレンチ設定し, 掘下げ。位置図平板測量。8トレンチ設定し掘下げたところ, 赤ホヤ層の下の層に礫が出土。
- 11月19日(火) 西中畑遺跡8トレンチ拡張し, 礫の集散を確認。礫は拳大の角礫を1ヶ所に40数個集めるほか, その周囲にも多数の礫が散在。
中迫遺跡及び西中畑遺跡土層断面実測。
- 11月20日(水) 西中畑遺跡3~6トレンチ土層断面実測。
- 11月21日(木) 西中畑遺跡5~7トレンチ掘下げ。8トレンチは再度拡張し, 範囲確認を急ぐ。
若干の土器片が出土。
- 11月22日(金) 西中畑遺跡8トレンチ出土の土器, 集石実測ののち各トレンチとも埋戻し。
- 11月25日(月) 葎園遺跡1トレンチ拡張, 小迫遺跡1~3トレンチ設定し掘下げ。1, 2トレンチより縄文晩期土器出土。
- 11月26日(火) 小迫遺跡各トレンチ掘下げ。土器, 石器出土。
- 11月27日(水) 小迫遺跡4, 5トレンチ設定掘下げ。遺物出土せず。
- 12月28日(木) 小迫遺跡1, 2トレンチ掘下げ。2トレンチ拡張。遺物実測ののち取上げ。
- 11月29日(金) 小迫遺跡2トレンチ拡張部は遺物少ない。土層断面実測。
- 12月2日(月) 小迫遺跡埋戻し。
- 12月3日(火) 発掘調査完了 埋戻し。
- 12月4日(水) 埋戻し, 用具等の収納。

第Ⅱ章 遺跡の位置・環境および周辺遺跡

志布志町は鹿児島県の東端部で、志布志湾の湾奥部に位置し、海岸線で東西に約10km内陸部に向かって約24kmの、細長く伸びる釣鐘形の形状をなしている。北東から東側へは宮崎県都城市および串間市と接して県境をなし、北西から西側へは末吉町、松山町、有明町とそれぞれ接している。

南面する海岸線は、ほぼ中央に位置する市街地を狭んで、西側は砂丘海岸が続くのに比べ、東側は日南層群で構成される岩礁海岸となっている。尚、市街地は比高40m程のシラス台地の海蝕崖下に生じた古期砂丘上に立地し、これは約6,000年前の縄文海進の名残りと考えられる。

内陸部の地形は、北部から東部にかけての山岳地帯は、主に新生代古第三期の地層と考えられている日南層群よりなる南那珂山系の西端域となり、これより西へ広がる広大なシラス台地（曾於丘陵地）には、この山系より派生する残丘状山地が北東より南西方向に、散発的に、次第に小起伏となって延びている。シラス台地は並行して南流する大小の河川の活発な侵蝕作用によって深い谷で分断され、さらにその支流によって樹枝状に広がる谷頭侵蝕で細かく刻まれ、大小幾多の狭長な台地を作り、谷底の低地とは急傾斜面や崖によって分けられている。町内を流れる河川は西側に延長24kmの安楽川が、東側を延長15kmの前川がそれぞれ南流しており、他に、北東山間部の四浦地区には大矢取川が宮崎県串間市を経て志布志湾へ注ぎ込んでいる。

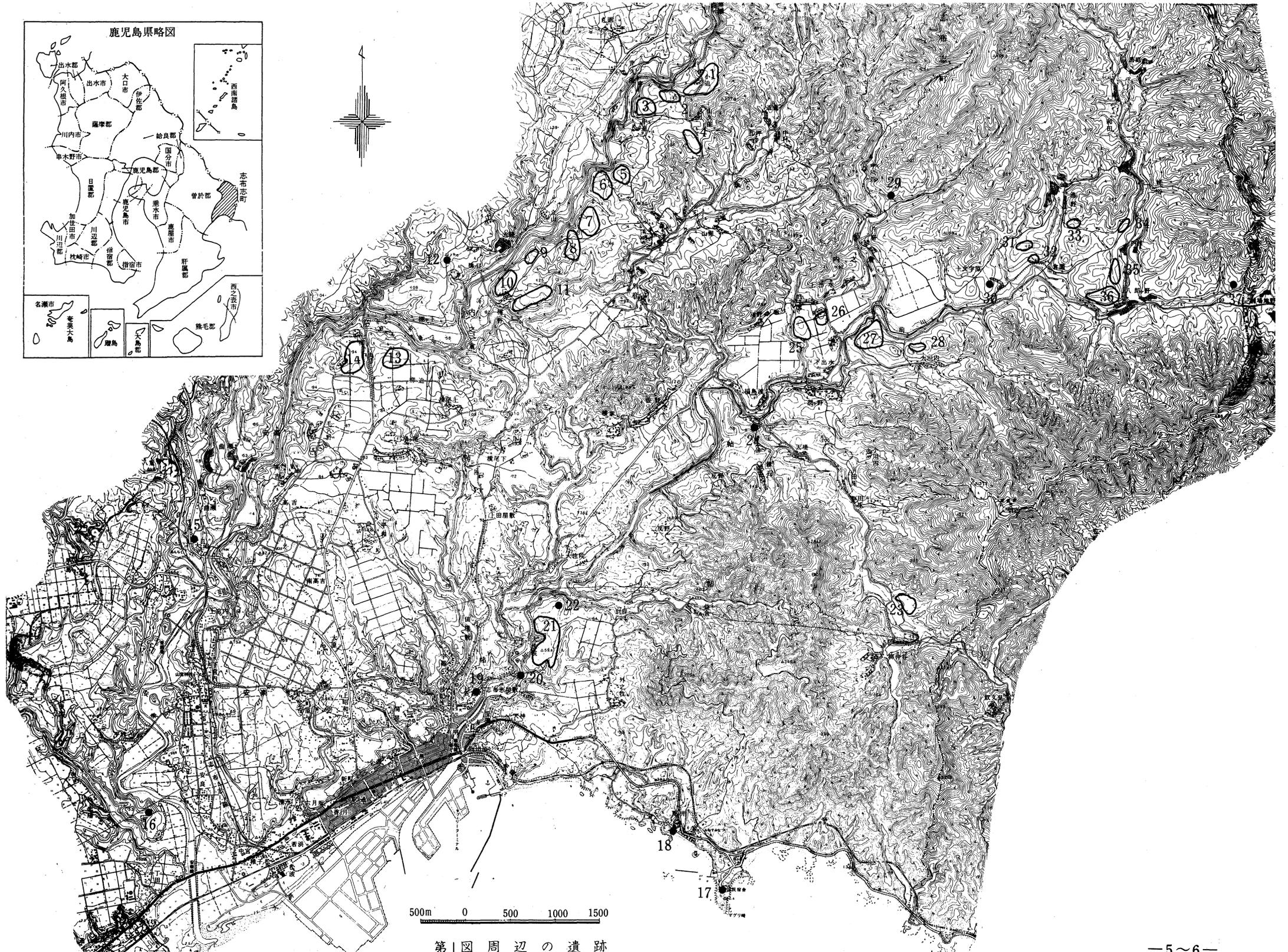
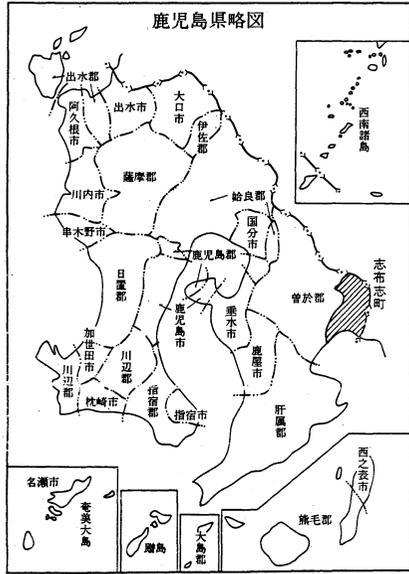
このような地形のため、町内に分布する約170個所の埋蔵文化財遺跡の多くは、山稜に付随するそれぞれの山麓台地上、あるいはその辺縁部に立地している。今回発掘対象となった山久保A、山久保B、蔵園、中迫、西中畑、小迫の各遺跡も、市街地より県道南之郷—志布志線を北へ約10kmの場所にある標高237mの通称山久保山から、南西方向に標高180mの高地に延びる山列と、この北側を平行して流れる安楽川との間に狭まれた、北西向のそれぞれ独立した舌状台地上に分布している。さらにこれらの南西方向には次年度以降に発掘調査が予定されている平原A、平原B、上樽野、樽野、上原の各遺跡があり、志布志町の中央部に位置するこの山並みの北西面山麓台地上に連続して11箇所の遺跡が分布している。

このように山、平原、川、海と、自然条件に恵まれているため志布志地方の埋蔵文化財は他の地域に比較すると圧倒的に多い。旧石器時代から古墳時代へと満遍なく続くが、なかでも志布志の縄文時代は「縄文銀座」と称されるほど遺跡の多い地方である。

まず志布志地方の学史をみると、すでに戦前から瀬之口伝九郎、梅原末治、島戸貞義、寺師見国氏らの多くの調査研究があり、戦後は海老原行秀、鏡山猛、小田富士雄、河口貞徳、諏訪昭千代、上村俊雄、酒匂義明、瀬戸口望氏等の諸先学の調査研究がある。特に瀬戸口氏は地元において諸先学の成果と絶え間ない踏査で、多くの縄文時代の論功を発表している。ここではこれらの成果について、いくつかの特筆すべき遺跡の概要を述べてみたい。

片野洞穴遺跡は町誌編さん事業の一環として昭和39年に発掘調査された水蝕洞穴遺跡で、前川

の支流、中川内川が山間部から中川内集落のある谷底平野にさしかかる部分にある。調査されたのは南壁面に沿った一帯で、入口から、長さ6m幅3mのトレンチ掘りをした結果、土器は轟式、曾畑式系、岩崎上層式、市来式、西平式及び弥生土器等が出土し、石器は3点と少ないが、敷石住居遺構や配石遺構などが認められ、獣骨も多く、猪、鹿を主体に多種類がありツキノワグマの骨やサメの歯等も出土している。獣骨製のかんざしや牙製の釣針はこの発掘の最大の成果といえる。また貝類は淡水産1：海水産9の割で相当量出土した。東黒土田遺跡は前川上流の宮崎県境に近い八郎ヶ野の台地上にあり、昭和55年に発掘調査された結果、隆帯文土器数点、舟形石組遺構、匙形石器等の出土があったほか、落葉性のクエルカスと思われる木の木の貯蔵穴が出土し、放射性炭素測定の結果、木の木としては国内最古の11300±130年の測定値が示されている。鎌石橋遺跡は前川中流域の、県道111号線を立花迫集落で分岐し、鎌石集落へ通じる鎌石橋を渡りきった右側一帯の河岸段丘上にある。昭和56年に発掘調査され、細石刃、細石核、剝片石器、ナイフ形石器、石鏃、磨製・局部磨製石斧等の石器類や、隆帯文土器、前平式、塞ノ神式、曾畑式の各土器片の他、炉跡、石組遺構等が検出された、特に隆帯文土器の出土は前述の東黒田遺跡と共に県下でも他に一例しかなく、縄文時代早期の究明に極めて重要な遺跡である。石踊遺跡は市街地より東へ2km程の益倉集落へ通じる台地上にあり、打製・磨製石斧、石鏃、石匙、スクレーパー等の石器類多数と、石坂式、吉田式、塞ノ神式、轟式、曾畑式、岩崎式等の他、縄文時代晩期に比定される赤色顔料による彩色の黒色研磨土器や、網目、席目等の組織痕文土器が出土している。野久尾遺跡は前川の上流約1kmの台地の鞍部にあり、昭和52・53年に発掘調査が行なわれ、剝片石器、石鏃、石匙、打製・磨製石斧、有孔石製品等の石器類と、撚糸文、轟式、春日式、指宿式、市来式、黒川式、土師器、須恵器など土器が出土したが、約5,000点の出土遺物のうちその8割は轟式土器でこの土器形式の究明には極めて重要な好資料である。倉園B遺跡は前川上流約12kmの北岸台地上に位置し、昭和57・58年に発掘調査を行ない石鏃、局部磨製石器等の石器類と、石坂式、吉田式、前平式の土器類の他、住居跡、土壇、集石、配石等の各遺構が多数検出された。中でも連穴土壇10基と、数千点の剝片石器の出土は今後縄文時代早期の解明に貴重な資料である。柳井谷遺跡は志布志町帖柳井谷の盆地状地形内の山麓舌状台地上にあり、昭和58年発掘調査の結果、打製石斧、小型ノミ状石斧、珧状耳飾りなどの石器類の他、岩崎上・下層式、指宿式、市来式、草野式、黒川式等の土器類があり、完形品も多く、また炭化した木の木も多量検出されている。中原遺跡は志布志町安楽曲瀬の安楽川と小瀬川に挟まれた舌状台地の先端に近い傾斜面にあり、昭和59年に発掘調査が実施された。石器は大型磨製石斧、小型ノミ状石斧等多数出土し、特に400個を超える石錘の出土は特筆される。土器は縄文時代中期終末から後期初頭の遺物がほとんどで、南福寺下層式や河高系の類似土器、磨消縄文、擬似縄文、指宿式等が多量に出土し、特に磨消縄文系で、瀬戸内地方の福田KⅡ式の完形に近い土器があったことはこの時期の土器文化の発達を考える上に重要な資料である。他に1,000個を超える土製加工品のメンコの出土や、性器や勾玉を模した軽石加工品、器面調整に使用したとみられる軽石製調整具等、貴重な資料が多い。



第1図周辺の遺跡

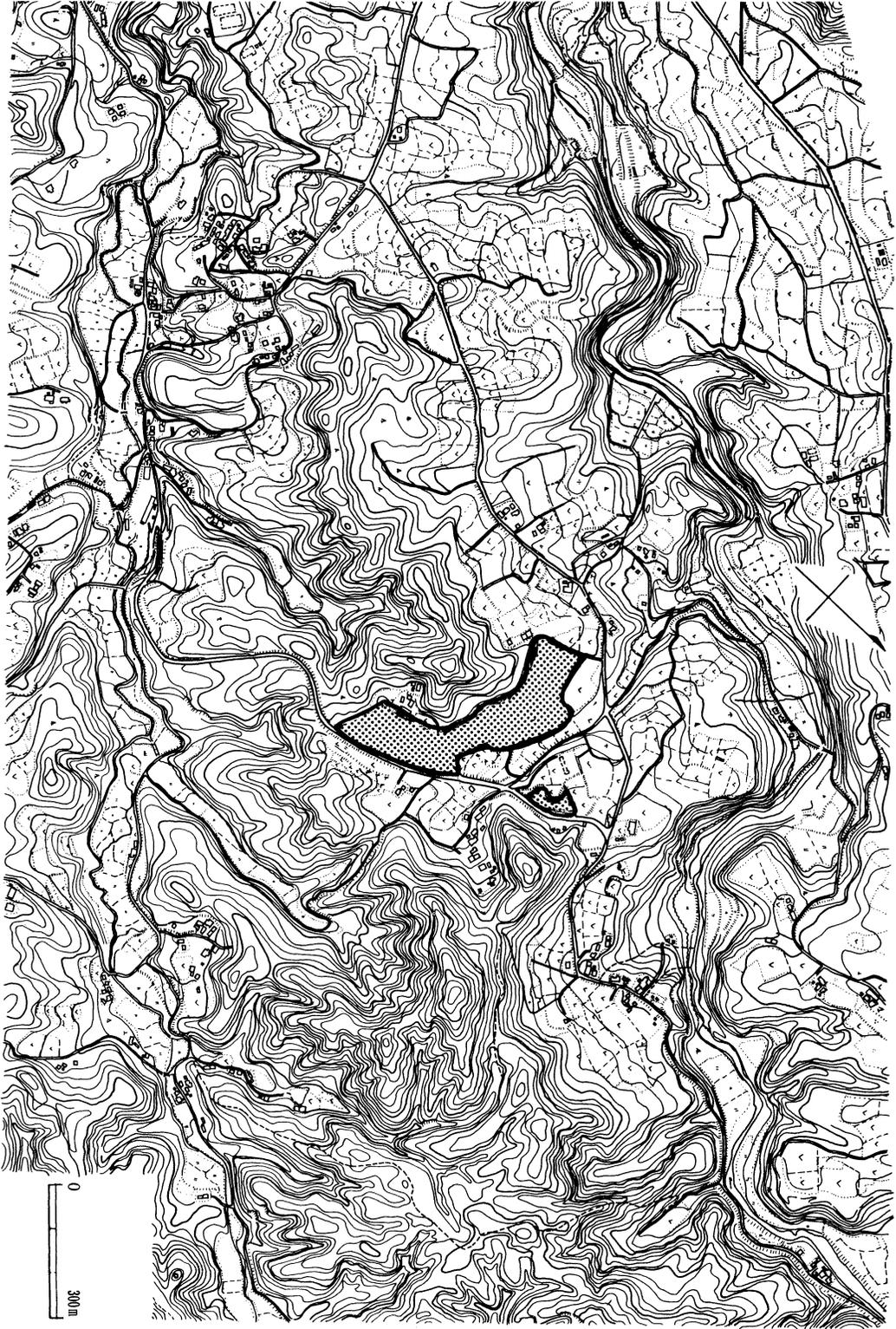
これら縄文遺跡の他、縄文・弥生土器類を共伴する複合遺跡も数十箇所あり、古墳時代の遺跡としては、高塚式として県内最古の五世紀中葉に比定される飯盛山古墳や、昭和58年に発見され、町の指定文化財となった小牧古墳1号墳などがある。

第1表 周辺の主な遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代	出土遺物	備考
1	小 迫	田之浦小 迫	縄文・弥生	土器(黒川式)石斧・石鏃・磨石 石錘	今回発掘(確認) 調査完了
2	山久保 B	〃 山久保	縄文	土器	〃
3	蔵 園	〃 蔵 園	縄文	土器(黒川式)・石斧	〃
4	山久保 A	〃 山久保	縄文	土器(阿高系・黒川式・入佐式)	〃
5	中 迫	〃 中 迫	縄文		〃
6	西 中 畑	〃 西中畑	縄文		〃
7	平 原 A	内之倉平 原	弥生		
8	平 原 B	〃 〃	弥生		
9	上 樽 野	〃 樽 野	縄文	土器(指宿式)	
10	樽 野	〃 〃	縄文	土器(市来式・夜臼系)・石斧 石皿 石鏃	
11	上 原	〃 上 原	弥生	土器(山ノ口式)	
12	橋 之 口	〃 橋之口	縄文	土器(入佐式)	鹿児島考古第6号
13	蓑 輪	〃 蓑 輪	縄文・弥生	土器(吉田式・山ノ口式)・石鏃	志布志町埋文調査 報告書(5)
14	柳	〃 柳	縄文・弥生	土器(石坂式・吉田式押型文 擦系文) 住居跡・集石	〃 (5)
15	中 原	安 楽中 原	縄文	土器(指宿式・福田KⅡ式) 石斧・石皿・軽石加工品	〃 (9)
16	小牧1号古墳	〃 小 牧	古墳	土器(土師器・須恵器) 軽石加工品	志布志町の埋蔵 文化財
17	飯盛山古墳	夏 井牟 田	古墳	壺形埴輪・勾玉・小玉・丸玉	志布志町誌
18	夏井ヶ浜	〃 前 田	縄文	土器(御領式・大石式 三万田式)・石斧・石鏃 石錘	鹿児島考古第7号
19	小 淵	帖 小 淵	縄文	土器(岩崎上,下層式・指宿式 市来式・草野式)・石錘	〃 第5号

番号	遺跡名	所在地	時代	出土遺物	備考
20	野久尾	帖野首	縄文	土器(燃糸文・轟式・春日式・指宿式) 石斧・石鏃	志布志町埋文調査 報告書(3)
21	石踊	〃石踊	縄文	土器(石坂式・吉田式・塞ノ神式 轟式・曾畑式・岩崎式)	〃 (4)
22	山ノ上	〃〃	縄文	土器(石坂式・塞ノ神式)・石核	鹿児島考古第5号
23	柳井谷	〃柳ノ下	縄文	土器(岩崎上,下層式・指宿式 市来式・草野式・黒川式)	志布志町埋文調査 報告書(6)
24	鎌石橋	〃前畑	縄文	土器(隆帯文・前平式・塞ノ神式 曾畑式)・細石刃・細石核	鹿児島考古第16号
25	出水	内之倉前畑	縄文	土器(楕円押型文)	〃第8号
26	上出水	〃東原	縄文	土器(石坂式・吉田式)・石斧 磨石・住居跡	〃第16号
27	土光	〃土光	縄文	土器(轟式・春日式・大平式 塞ノ神式)・石鏃・石皿	志布志町埋文調査 報告書(10)
28	風穴	〃風穴	縄文	土器(石坂式・塞ノ神式)・磨石・石皿	〃(10)
29	片野洞穴	〃片野	縄文・弥生	土器(轟式・曾畑式・岩崎上層式 市来式・西平式)	志布志町誌
30	十文字	〃十文字	縄文	土器(岩崎上,下層式・指宿式) 石鏃・石錘	志布志町埋文調査 報告書(5)
31	倉園B	〃倉園	縄文	土器(石坂式・吉田式・前平式) 連穴土壇・集石	〃(7)
32	倉園A	〃大原	縄文	土器(岩崎上,下層式・指宿式 鐘ヶ崎式)・石皿	〃 (10)
33	池野	〃池野	縄文	土器(春日式)・石斧・石皿	〃(8)
34	井手平	〃井手平	縄文	土器(吉田式・前平式・塞ノ神式 平栴式)・細石核	〃(8)
35	八郎ヶ野A	〃向原	縄文	土器(晩期)・石斧・石鏃・磨石	〃(8)
36	八郎ヶ野B	〃大原	縄文	土器(無文)・石斧・磨石・石鏃・石皿	〃(8)
37	東黒土田	〃東黒土田	縄文	土器(隆帯文・平栴式・塞ノ神式) 木の実貯蔵穴	鹿児島考古 第14・15号

山久保 A 遺跡



第2図 山久保A遺跡位置図



第3図 山久保A遺跡トレンチ配置図

第1節 調査の概要 (第2, 3図, 図版1~3)

山久保A遺跡は、志布志町の街より県道南之郷~志布志線を北へ約10km行った県道沿いの志布志町大字田之浦字山久保に位置する。

このあたりは、志布志湾に流入する安楽川の中流域で、安楽川の左右には帯状の台地が開ける。台地縁辺部は急峻な崖となって安楽川に続き、基部は標高約200m内外の山の裾部となり、その間も小さな起伏となる。

山久保A遺跡も、この台地の一部で北、南、西は山に囲まれ、わずかに北が開く袋状の台地基部である。

しかも北へ開く地形は、開口部へ向けて傾斜するために一見、谷頭状を呈する。

このような地形であるため、人家は山裾に配され、畑地は、高い部分を削平し、低地を埋めて一定のレベルとする段々畑である。

従って、一枚の畑地のうち高い部分はシラス層まで削平、低い部分は表層上に削平土が乗る状態である。

トレンチ設定にあたっては、現形をとどめる地点を任意に選定し、2m×4mのトレンチを6ヶ所設定した。

ここでは、遺物が出土した。1, 5トレンチと2, 6トレンチについて記述する。

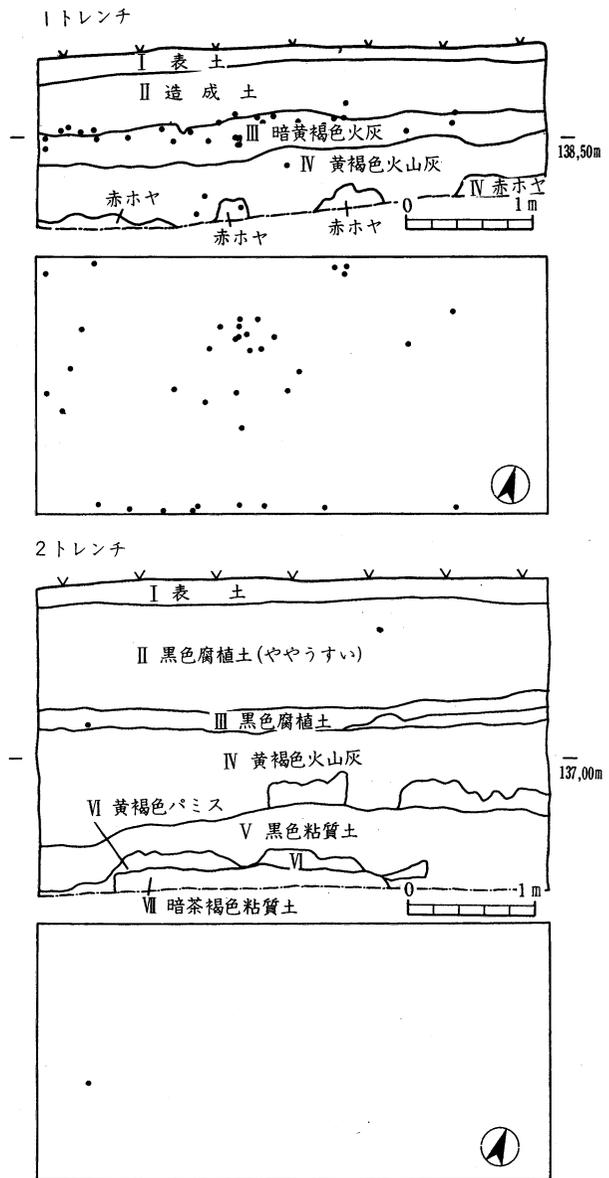
第2節 1トレンチ (第4,6図 2,3)

1. 土層

土層は南北に傾斜し、東西には略水平である。

I層は、現在の耕作土で厚さは10~20cmである。

II層は、畑地を平坦にした時の造成土で40m前後の厚さである。



第4図 1, 2トレンチ土層断面・遺物出土分布図

Ⅲ層は、暗黄褐色を呈するもので「御池」が噴出源といわれる火山灰土層で30cm前後の厚さで堆積する。遺物はこの層を主体に次のⅥ層まで包含されている。

Ⅳ層は、黄褐色火山灰土層「御池」で、厚さは20cm~50cmを計る。

Ⅴ層は、黄褐色パミスで、ブロック状に堆積する。

2. 遺物

出土遺物はⅢ層を主体に出土し、Ⅳ層にはわずかに出土する。

1は、暗茶褐色を呈する厚手の土器で、口唇部は凸凹があり、口縁部には太い曲線文が描かれている深鉢形の阿高式土器である。2も阿高式土器片である。

3~8は、黒色研磨の浅鉢形土器である。このうち3には口縁部の内側に横位の沈線が1条巡らされ、5には口唇部にリボンが付く。縄文時代晩期の黒川式かあるいはそれに近い型式であろう。9~10も研磨土器片である。

11~13は、縄文時代晩期の組織痕土器である。口縁部には粗い横位の条痕その下に網目の組織痕を施す。

第2節 2トレンチ (第4, 7図, 図版3)

1. 土層

Ⅰ層は20cmの厚さの耕作土。

Ⅱ層、Ⅲ層は黒色腐植土層で、Ⅱ層はⅢ層に比較してやややすい。厚さはそれぞれ80cm 20cmを測る。

Ⅳ層は、黄褐色火山灰土層で60cm~90cmを測る厚い堆積を示す。

Ⅴ層は、黒色粘質土層。

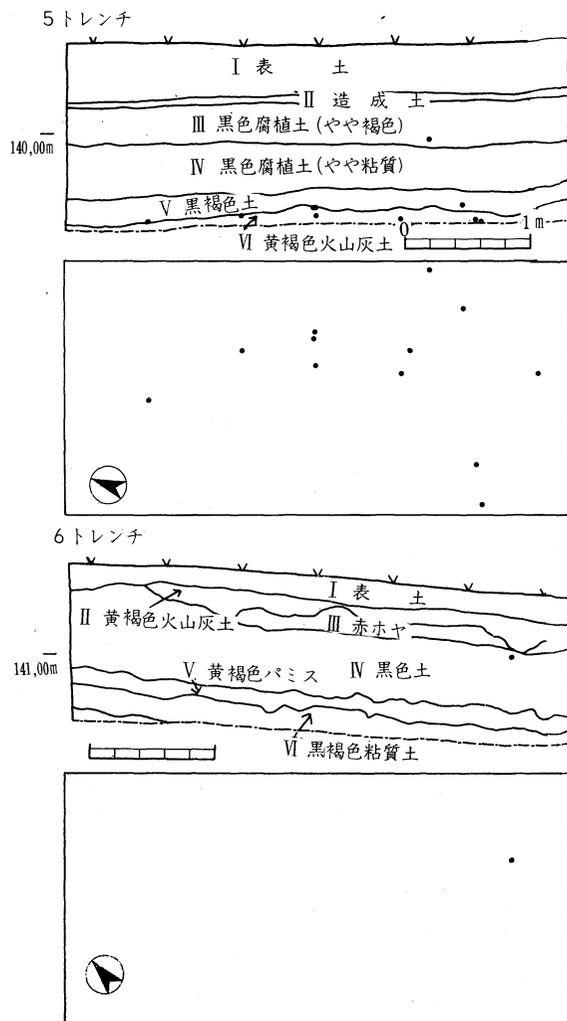
Ⅵ層は、黄褐色パミス「サツマ」で10cm内外でブロック状に堆積する。

Ⅶ層は、暗茶褐色粘質土である。

2. 遺物

遺物は、Ⅲ層下部に1点出土した。

16は、内側に稜を作って外反する口縁部から肩部で張る器形の深鉢形土器である。色調は茶褐色を呈し、器面に煤が付着する。縄文時代晩期の入佐式に近い形式であろう。



第5図 5, 6トレンチ土層断面・遺物出土分布図

第3節 5トレンチ (第5, 7図, 図版3)

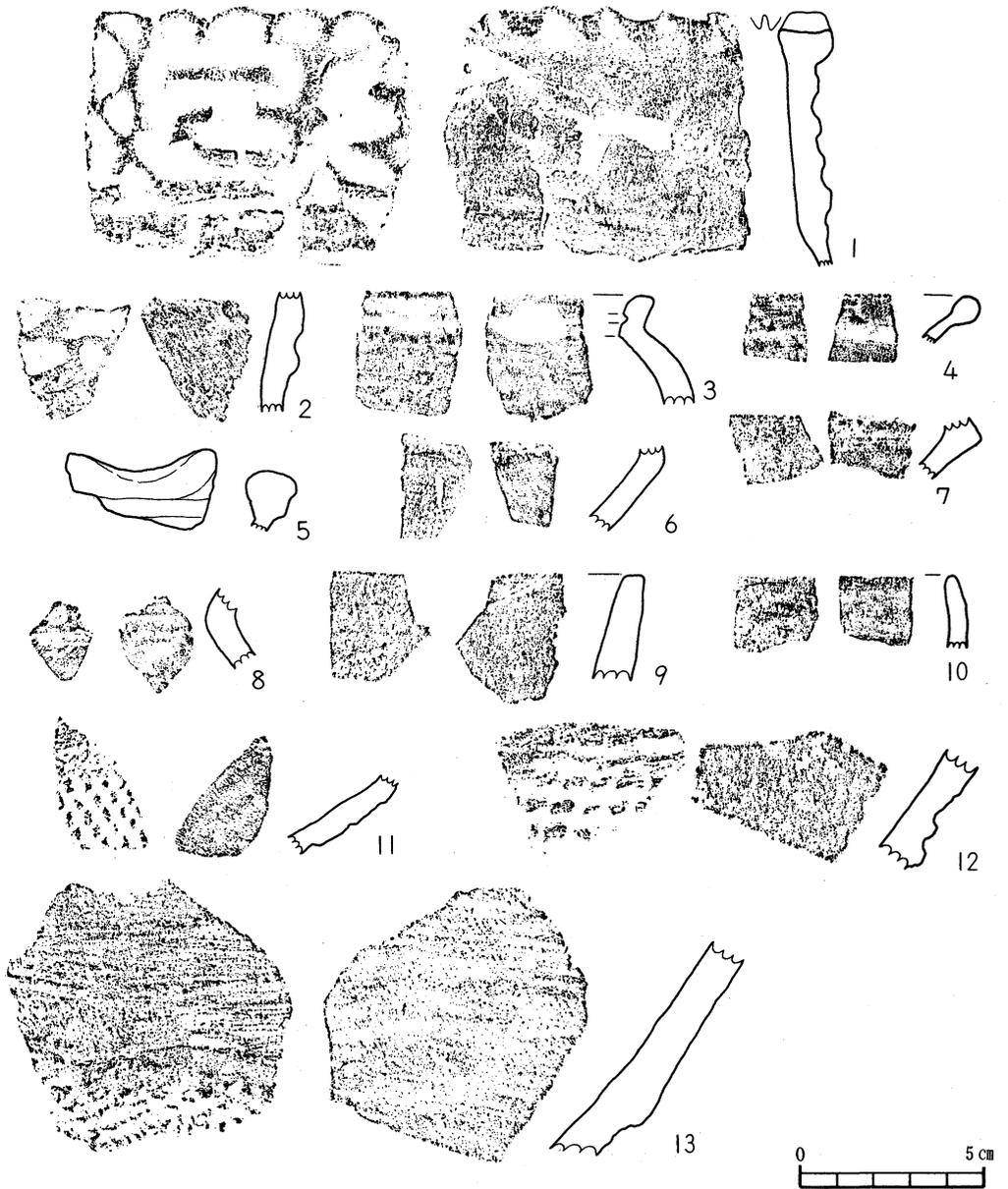
1. 土層

I層, II層は, 耕作土で約40cmを測る。III層はやや褐色の黒色腐植土層で厚さは30cm~40cm

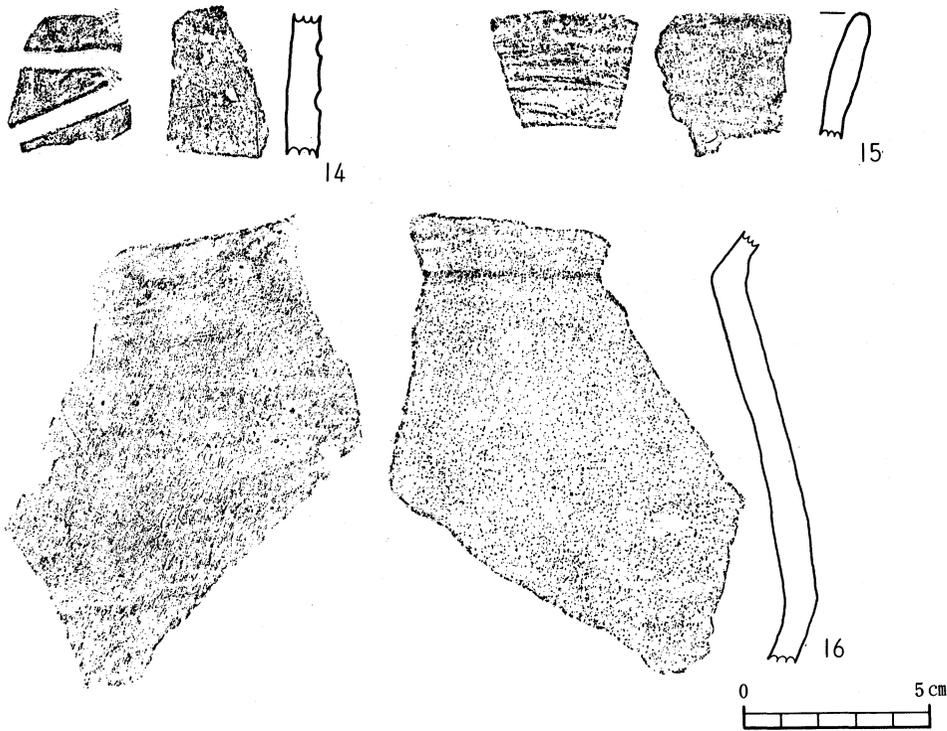
IV層はやや粘質の黒色腐植土層で30cm~40cmの厚さである。

V層は黒褐色土層, VI層が黄褐色火山灰土層である。V層は10cm前後と薄い堆積を示す。

VI層は遺物が出土した面で止めたため層厚については不明である。



第6図 出土土器実測図(1)



第7図 出土土器実測図(2)

2. 遺物

遺物は、V層、VI層に出土するが主体はVI層である。14は太い曲線の凹線文を施す、黄褐色の土器、15は、器面を研磨する薄手の黒褐色の土器で煤が付着する。14は縄文時代中期、15は縄文時代晩期該当の土器であろう。

第4節 6トレンチ (第5図, 図版2)

6トレンチは、本遺跡の北端で一段小高くなった地形のところである。発掘調査の結果、土器片1片を採集したのみである。土層は図示するごとくIII層面まで一部は攪乱を受けている。

第5節 3, 4トレンチ

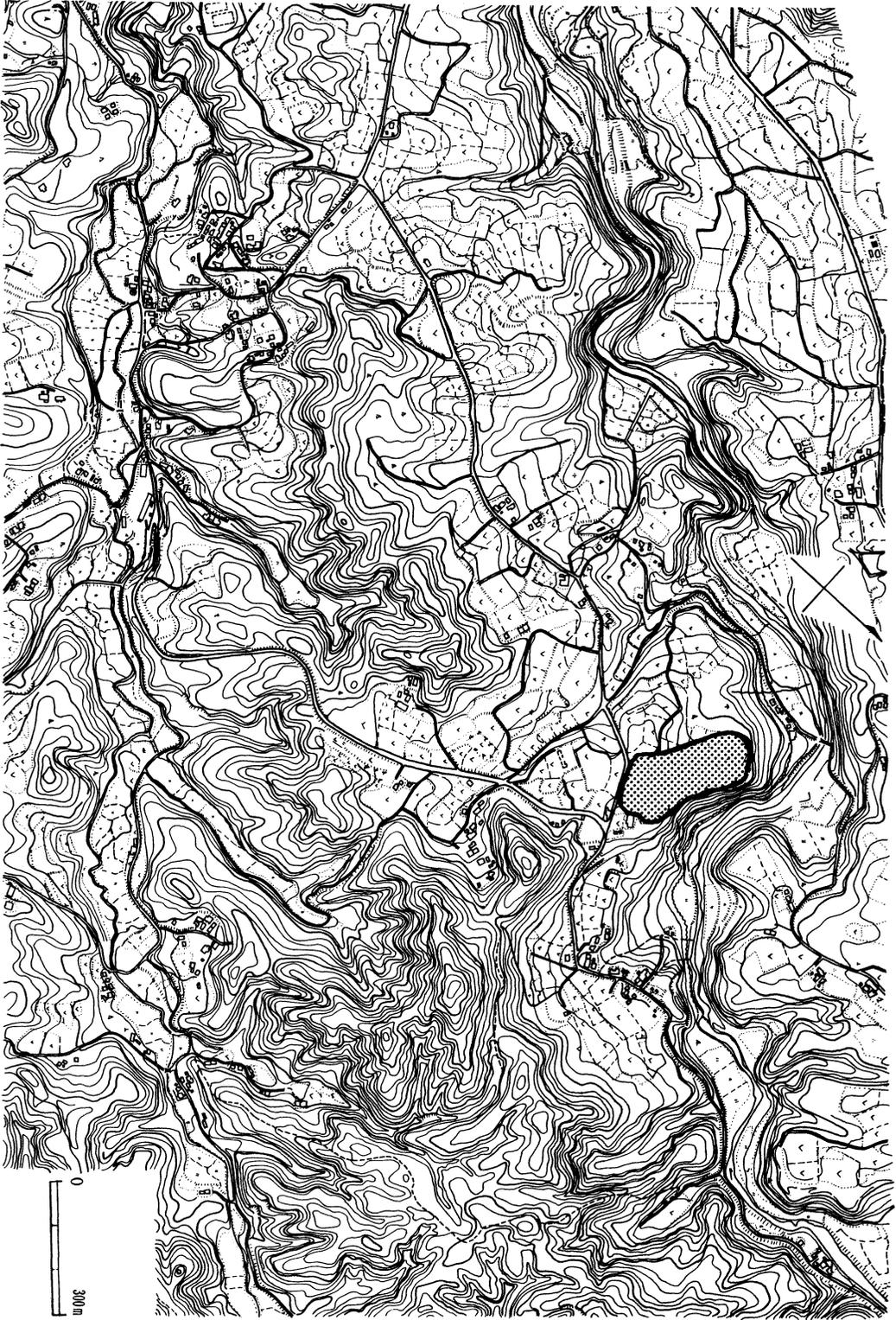
両トレンチとも本遺跡の西端に位置し、山裾の傾斜面である。出土遺物は皆無であった。

第6節 まとめ

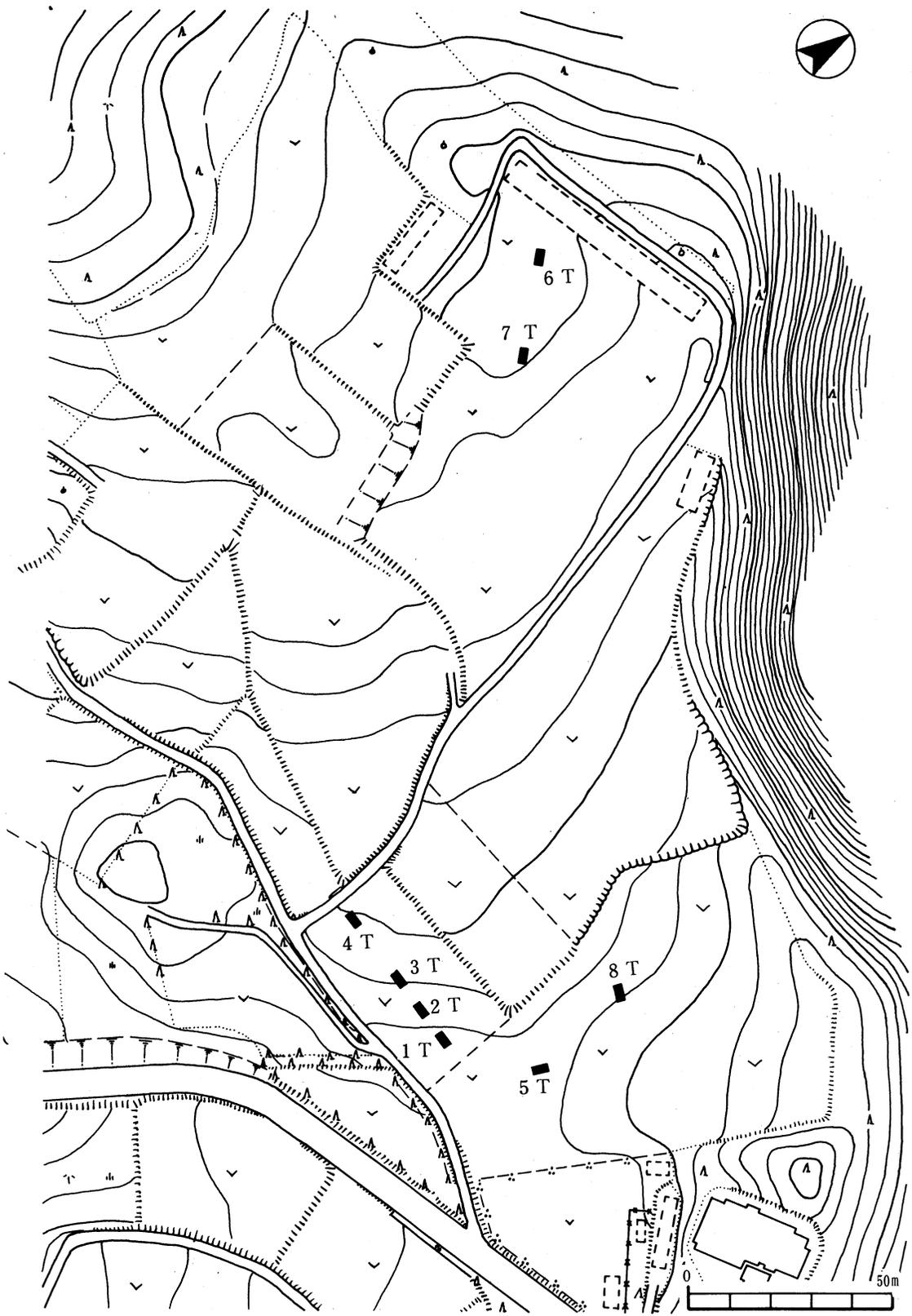
山久保A遺跡は、調査の結果1, 2, 5トレンチ周辺を主体に縄文時代晩期の土器が、黄褐色火山灰層を中心に出土し、若干他の土器も出土する。トレンチ調査の範囲では遺構は検出されなかった。

なお遺跡の範囲は、周辺の作物の関係で拡大することができず明確にはできないが、これらのトレンチに隣接する西側で、山際までの範囲は遺跡の存在する可能性のあるところであろう。

山久保 B 遺跡



第8図 山久保B遺跡位置図



第9図 トレンチ配置図

第1節 調査の概要(第8, 9図, 図版4~6)

山久保B遺跡は、安楽川の中流右岸に形成された帯状台地の一部で西面する。台地は、東より西側へ傾斜し、西端は急崖をへて安楽川に続く、台地の南側には浅い谷状の窪地があるためわずかに舌状を呈する。

現在はすべて畑地となっている。この畑地も、斜面を削平し一枚の畑としたために、一部はシラス層まで達している所もある。

また、浅い谷状の窪地は、高所の土を搬入し平坦化を図っている。

このような地形のため、トレンチの設定にあたっては、できるだけ現地形をとどめる場所を選び、8ヶ所を設定した。

第2節 1,4トレンチ(第10, 12図, 図版4~6)

1. 土層

基盤の入戸火砕流堆積物(シラス)までVII層を確認できる。

I層は、耕作土である。

II層は黄褐色火山灰土「御池」で、詳細に観察すると、色調により3枚に区分できるところもある。厚さは20cm~1mを測り一定でない。これは地形が窪地の場合、ここに流入し堆積することに起因する結果であろう。

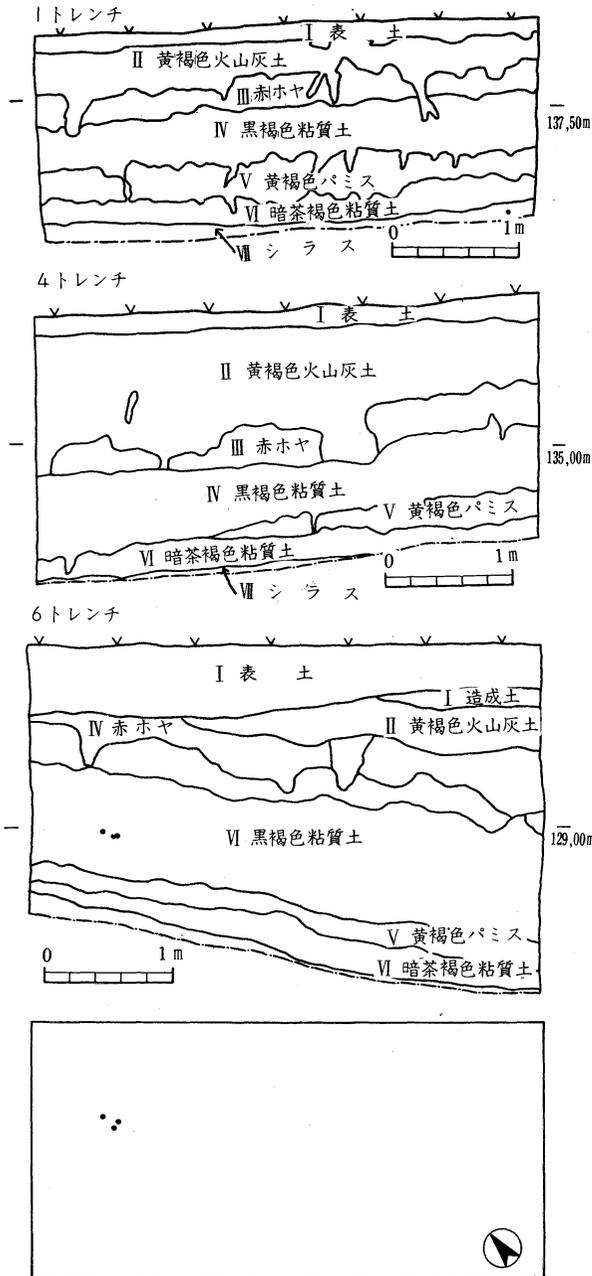
III層は、赤ホヤ層である。所によっては浸食を受けてブロック状となる。厚さは30cm内外である。

IV層は、黒褐色粘質土で、厚さは40cm~60cmを測り、幾分西へ傾斜する。

V層は、黄褐色パミス層で、「サツマ」と呼ばれているものである。

VI層は、暗茶褐色粘質土である。

VII層はシラス層ある。層序は略水平であるが、III層以下は若干西へ傾斜し、当時の地形をうかがい知ることができる。



第10図 1, 4, 6トレンチ土層断面・遺物出土分布図

2. 遺物

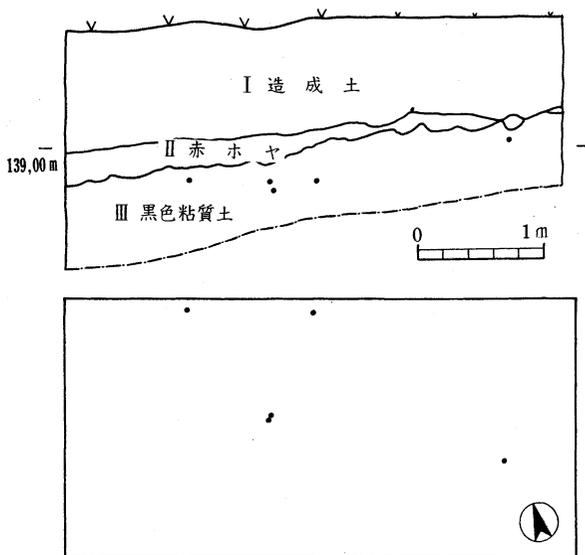
1, 4, 及び隣接する2, 3トレンチとも出土遺物は皆無であった。

第3節 6トレンチ(第10図, 図版5)

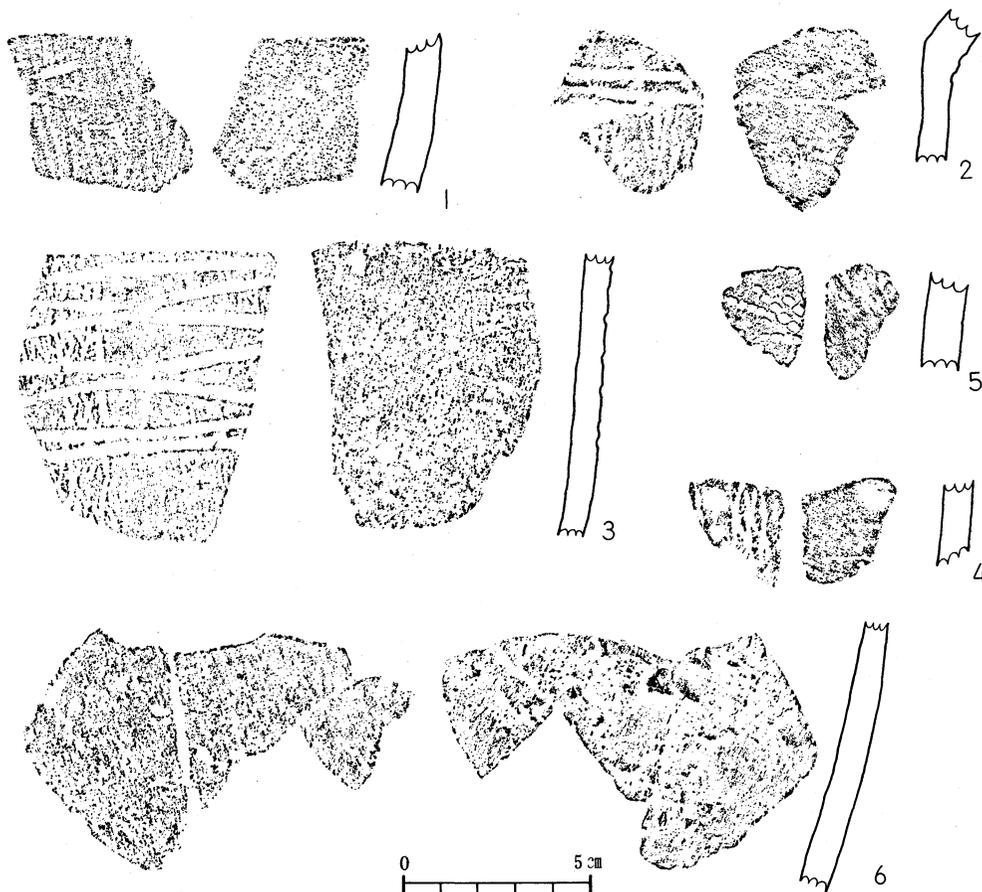
6トレンチは台地の先端部に位置する。現況は開墾により平坦であるが、各土層の堆積も厚く、窪地であったことを示している。

1. 土層

各層序は基本的に1トレンチ等と同様である。V層までは台地先端の北西へ向けて傾斜が激しく、IV層になると層厚も80cm前後と厚く堆積し、やや水平となり安定度を増してくる。IV層から上位は造成等により攪乱がはげしい。



第11図 8トレンチ土層断面・遺物出土分布図



第12図 出土遺物実測図

2. 遺物

遺物は、Ⅳ層中位に土器片3点が出土した、細片のため図化し得ない。

第4節 8トレンチ (第11, 12図, 図版6)

8トレンチは、1～4及び5トレンチの北側で、現況では平担であるため遺存度の良い所としてトレンチを設定した。

1. 土層

Ⅰ層は、造成土、Ⅱ層は赤ホヤ層、Ⅲ層は黒色粘質土となり、他のトレンチでみるような、黄褐色火山灰土等はすでに削平されていた。

土層は、台地先端部の北西側へと傾斜する。

2. 遺物

遺物は、Ⅲ層の黒色粘質土層中に5点の土器片が出土した。

1は、器内外面ともに貝殻条痕文を施す茶褐色を呈する土器である。2は、口縁部が強く外反し、器面には縦位に撚糸文を施す。3も2と同様な土器で、撚糸文を縦位に施したのち、横位に交叉する沈線を施す。4もやはり撚糸文を施す土器片である。色調はいずれも茶褐色を呈する塞之神Aa式の土器である。5は器面に貝殻圧痕文を観察できる土器片である。6は、底部近くの破片である。

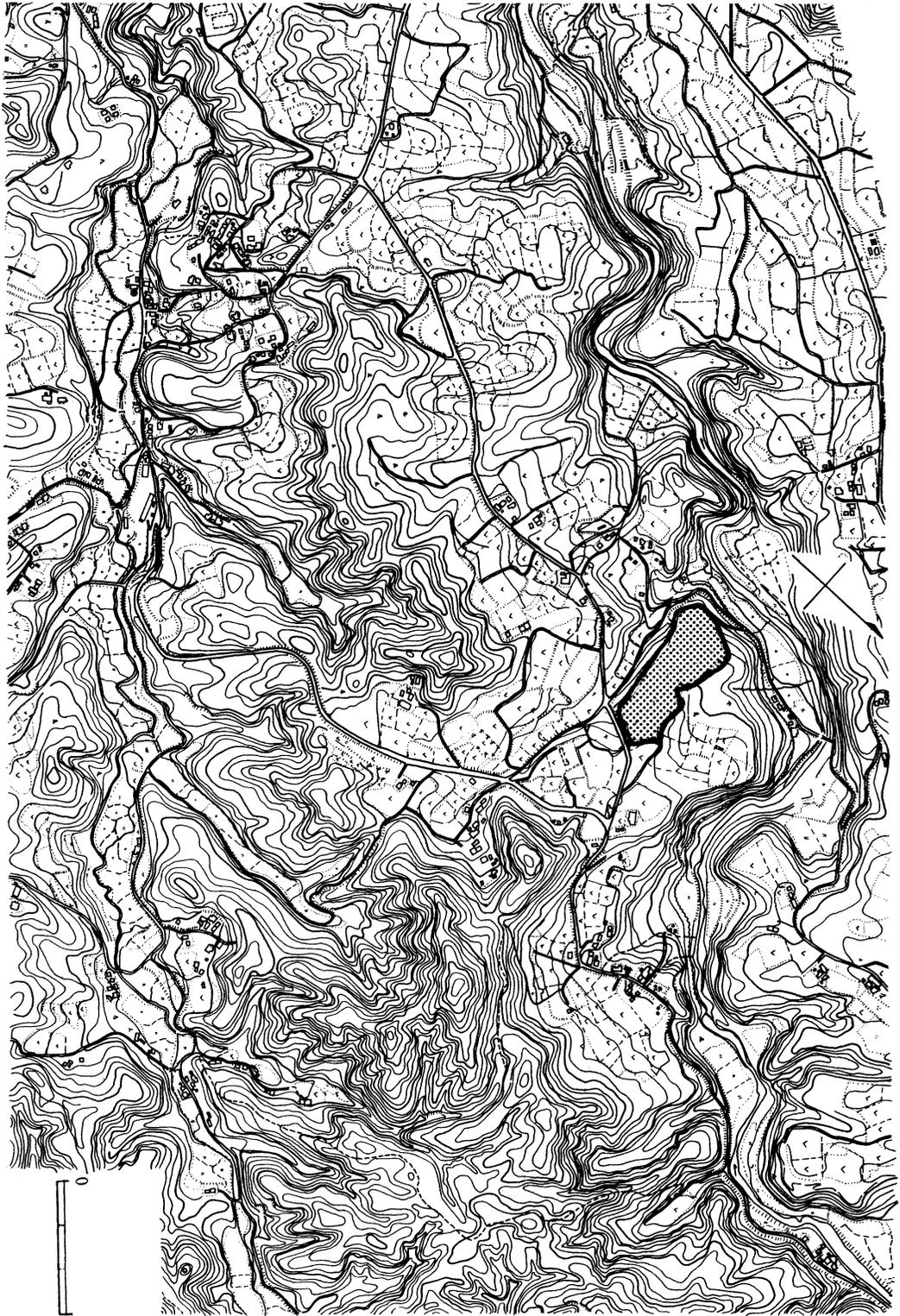
第5節 その他のトレンチ

以上記述した以外に2本のトレンチを設定し、調査を行なったが、遺物は出土しなかった。層序も基本的に変化はない。

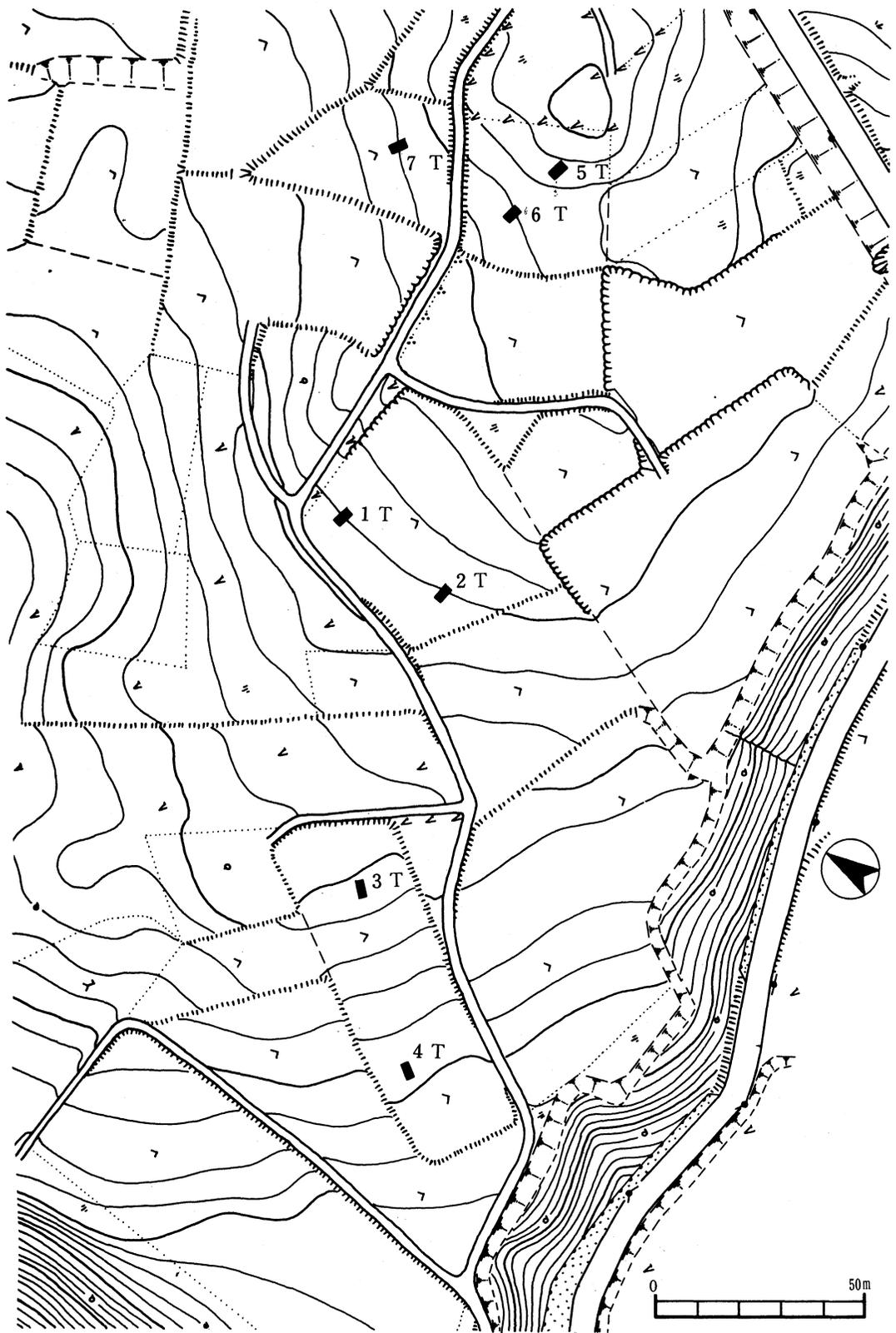
第6節 まとめ

山久保A遺跡は、地形にも恵まれているため遺跡の可能性が強いと期待したところであったが、小谷状の地形を埋めて畑地となった所であり、遺物もわずかに8トレンチに出土しただけである。しかも、この畑地の東側はすでに削平されて、遺物包含層のⅢ層が露呈している状態である。

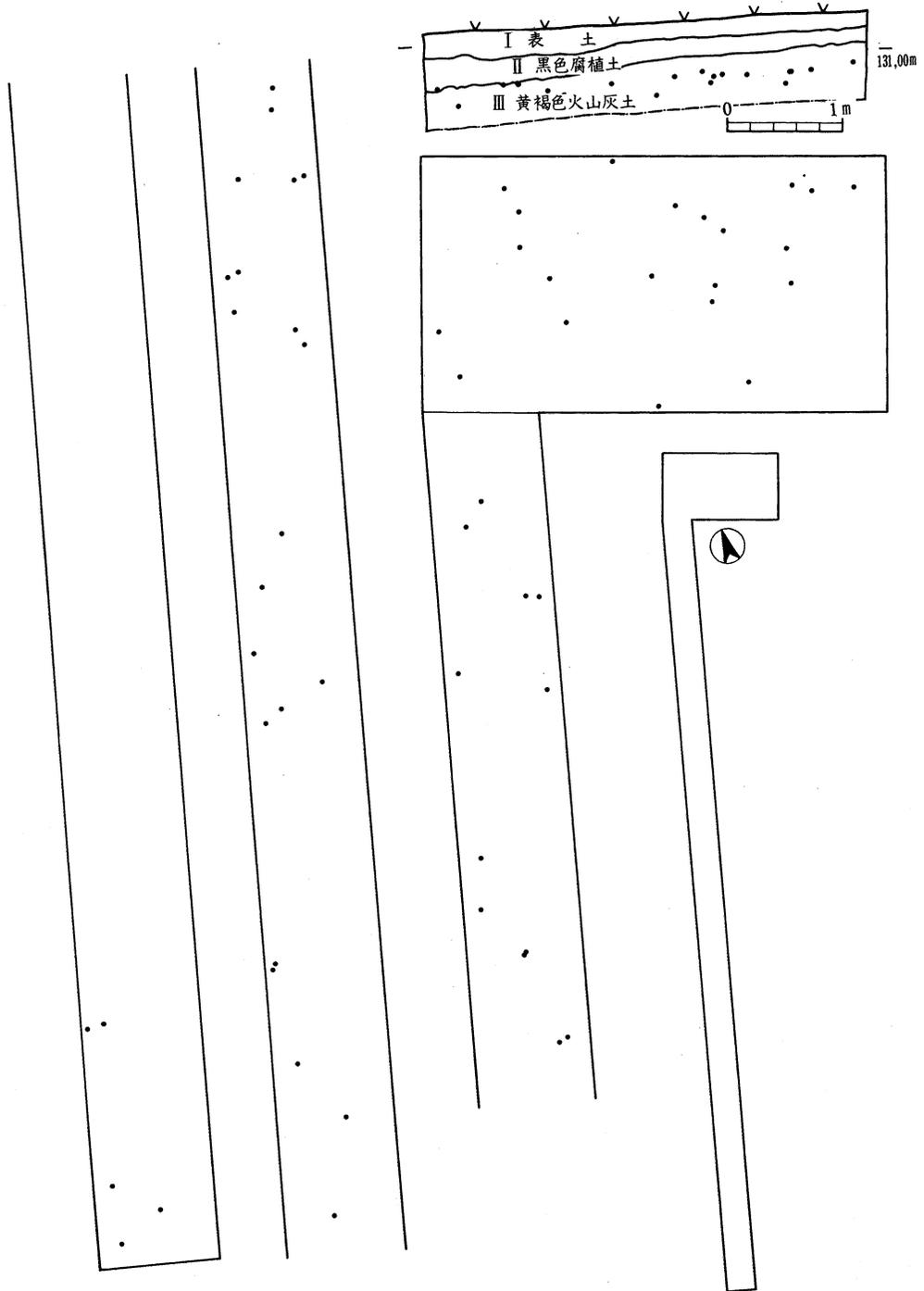
藏園遺跡



第13図 藏園遺跡位置図



第14図 トレンチ配置図



第15図 Iトレンチ土層断面・遺物出土分布図

第1節 調査の概要 (第13, 14図, 図版7~9)

蔵園遺跡は、山久保B遺跡の西に隣接するもので、同一台地上に位置する。

南及び西側は、比高差約20mの急峻な崖となり谷に続く。北側は安楽川を望む台地の先端部となる北面する小台地である。細かくみると、5~6トレンチ付近は北面し3~4トレンチ付近は西面する地形を呈している。

本遺跡を含むこの地域も開墾が進み削平された畑は段々畑となる。

第2節 1トレンチ (第15, 18, 19図, 図版8, 9)

同一畑に2ヶ所のトレンチを設定し掘下げた結果1トレンチに遺物の出土をみ、南側の2トレンチには遺物の出土はなかった。

このため、遺物の拡がりを確認するため両トレンチをつなぐ形で幅1mのトレンチを設定した。

1. 土 層

I層は20cm~30cmを測る表土である。

II層は、15cm~30cmの厚さで堆積する黒色腐植土で西に傾斜する。

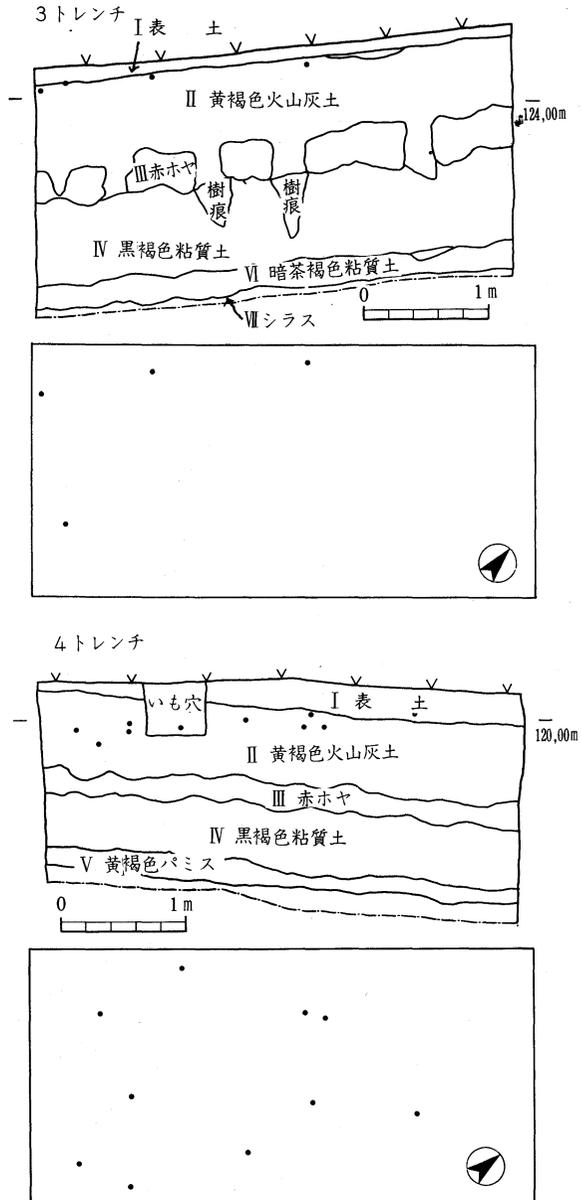
III層は、黄褐色火山灰土で40cm前後の厚さである。

III層以下については、遺物が出土したIII層で発掘を止めたため不明である。

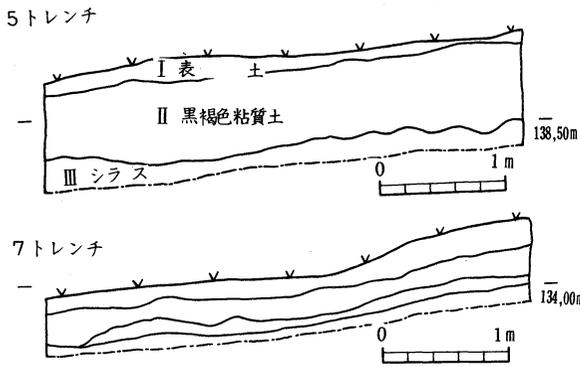
2. 遺 物

III層を主体に土器、石器が出土した。

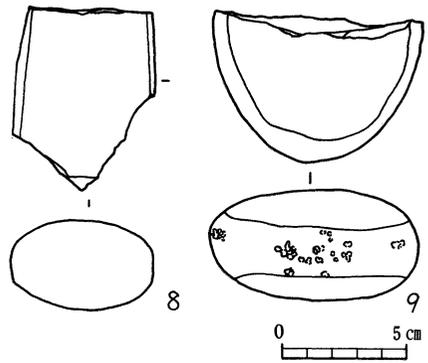
1~5は縄文時代晩期の土器で、1は、研磨された浅鉢形土器、3、4は、篋目圧痕文土器、5は、口縁部がやや外反する粗製の甕形土器である。5には煤が付着する。8は安山岩の磨製石斧片、9は砂岩の磨石残欠である。



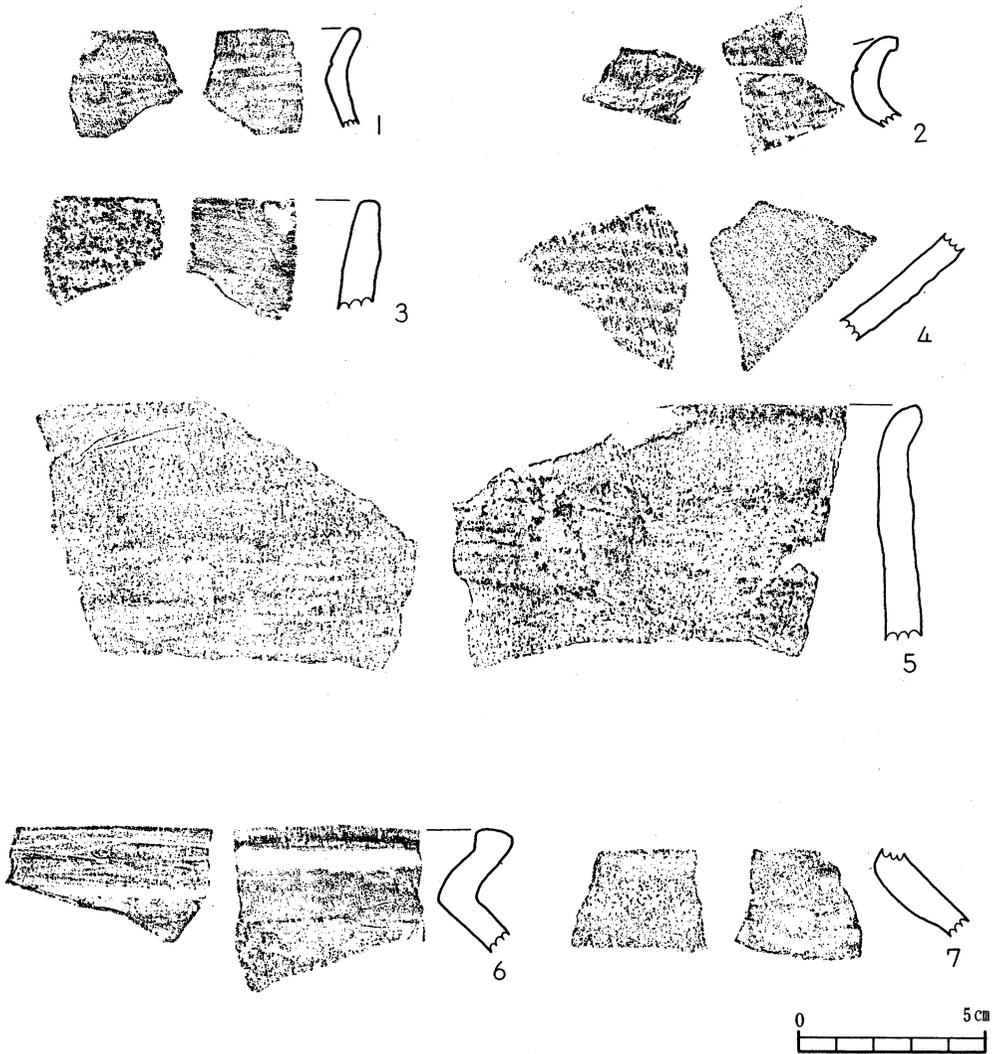
第16図 3, 4トレンチ土層断面・遺物出土分布図



第17図 5,7トレンチ土層断面図



第18図 出土石器実測図



第19図 出土土器実測図

第3節 3, 4トレンチ (第16, 19図, 図版8, 9)

3, 4トレンチは葎園遺跡の西端に位置する。

この辺は、西面する緩傾斜地で台地の先端部である。トレンチは同一畑に2本設定した。

1. 土 層

I層は、表土、II層は、黄褐色火山灰土層で60cm~80cmの厚さを測り西へ傾斜する。III層の赤ホヤ層は浸蝕を受けたためブロック状を呈する。IV層は、黒褐色粘質土で厚さ70cmを測る。V層は黄褐色パミスである。VI層は、暗茶褐色粘質土、VII層はシラスとなる。

2. 遺 物

遺物は、II層上面に出土する。基本的な層序はこのII層上位に黒色腐植土が堆積するが、ここでは、削平されて確認できない。この削平はIII層にも及んでいるため、遺物は表土直下に出土することになる。

出土遺物で図化できたものは2点で、他は細片ばかりであった。

6は黒色研磨の浅鉢形土器で黒川式該当であろう。7は浅鉢口縁部である。

第4節 5, 7トレンチ (第17図, 図版9)

5, 7トレンチはこの台地の最頂部に位置するため、土壌の流出が著しく、残存する土層は図示するようである。5トレンチの表土下は、基本層序でいけば、2層堆積するから、本地区ではこの2層が削平されたことになる。

第5節 その他のトレンチ

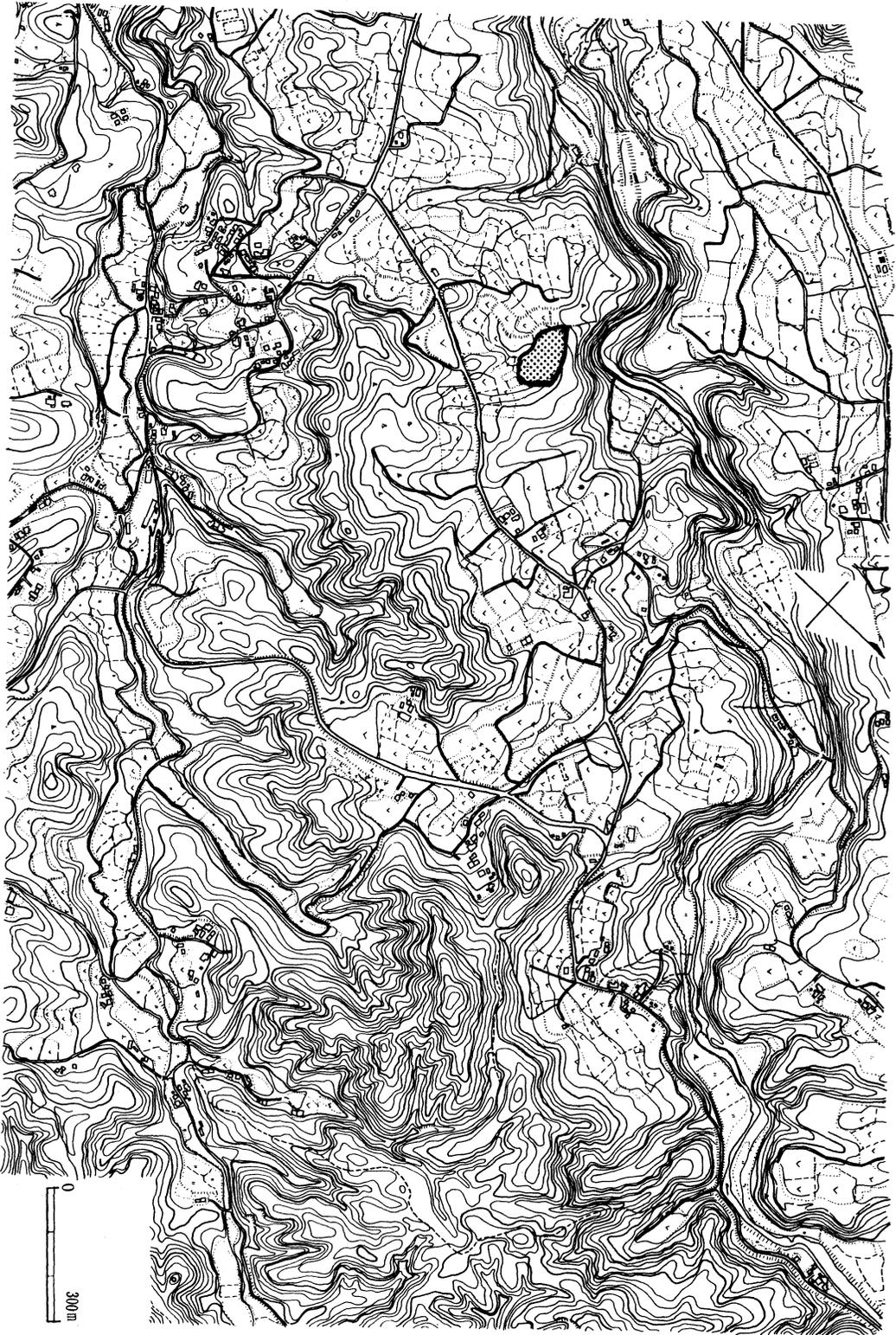
5, 6トレンチの北側にトレンチを設定し掘り下げたところ、表土下は直にシラス層であった。

第6節 ま と め

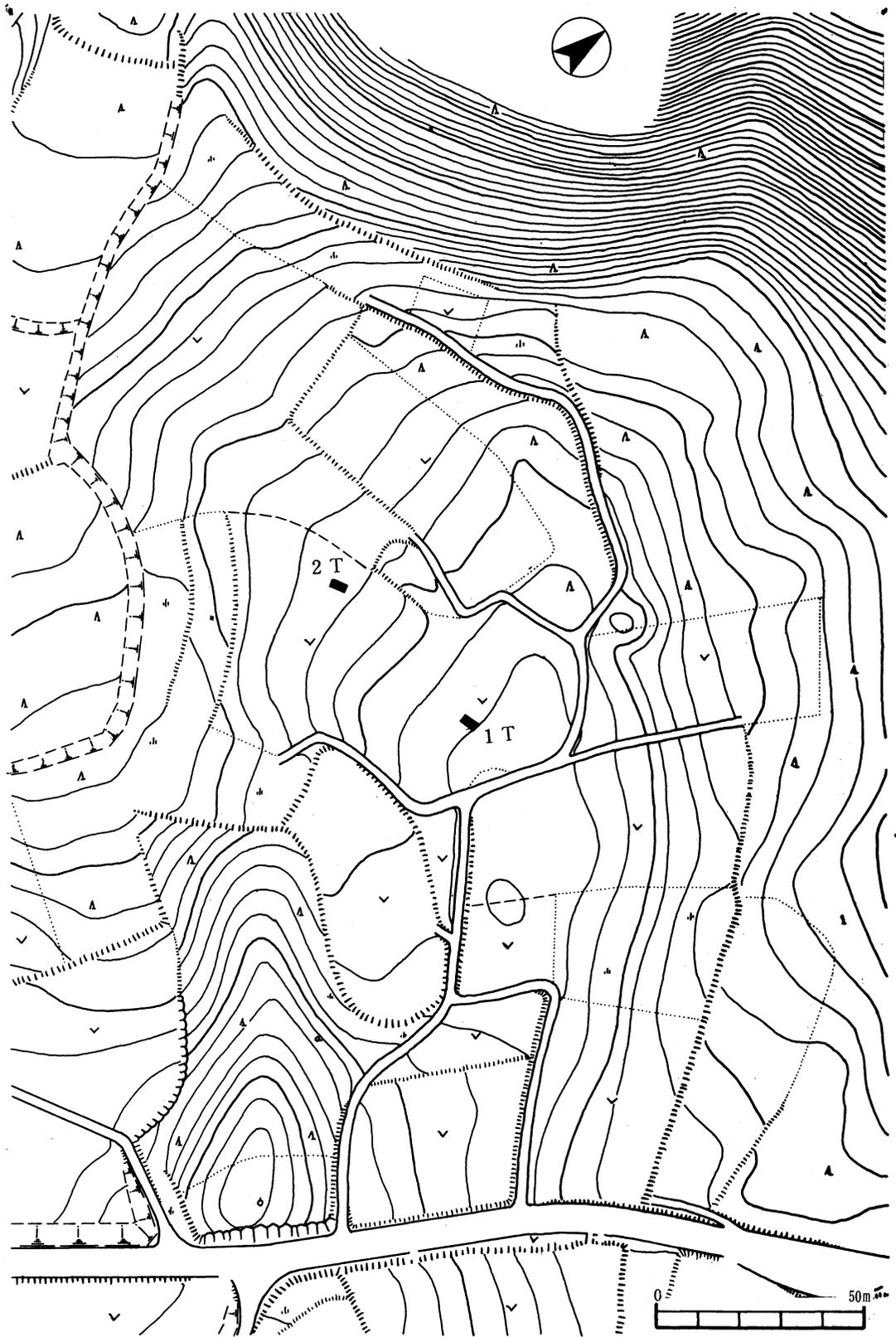
発掘調査の結果、トレンチに縄文時代晩期の包含層が畑の北側半分約900m²に残存していることが確認できた。この地点以外は良好な遺跡が残存しているところはなかった。

縄文時代晩期の層は、耕作土直下となり耕作や畑地造成のための破壊が著しい。

中迫遺跡



第20図 中迫遺跡位置図



第21図 トレンチ配置図

第1節 調査の概要 (第20, 21図, 図版10)

中迫遺跡は、安楽川の右岸にあり、西面する帯状台地である。台地は西へ向け緩やかに傾斜して安楽川に達する。

トレンチは、現形を止めていると思われる地点2ヶ所を選んで設定した。

第1節 1トレンチ (第22図, 図版10)

1. 土 層

I層は、厚さ20cm~30cmを測る表土である。

II層は、黄褐色火山灰土で、東側で30cm堆積し、西側の傾斜面に行くにしたがって厚くなり60cm~100cmを測る。

III層の赤ホヤ層は、北側では良好な堆積を示すが、II層同様西側になると攪乱気味となる。この傾向はIV層からVI層にもいえることで、トレンチの西端ではIV層以下の層が混在する。

IV層は、黑色粘質土で、東側での60cmの堆積は西側では厚さ10cmの層となりかなり混乱する。

V層は、黄褐色パミス、通称「サツマ」で10cm内外と薄く堆積する。

VI層は、暗茶褐色粘質土で20cm内外の堆積を示す。

2. 遺 物

遺物、遺構とも出土しなかった。

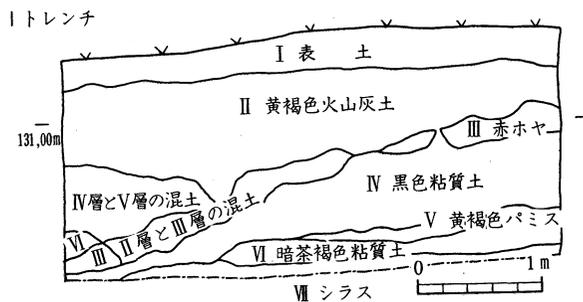
第2節 2トレンチ

1トレンチより約40m西側の傾斜面に設定した。層序は、1トレンチと同様で、遺構、遺物は出土しなかった。

第3節 ま と め

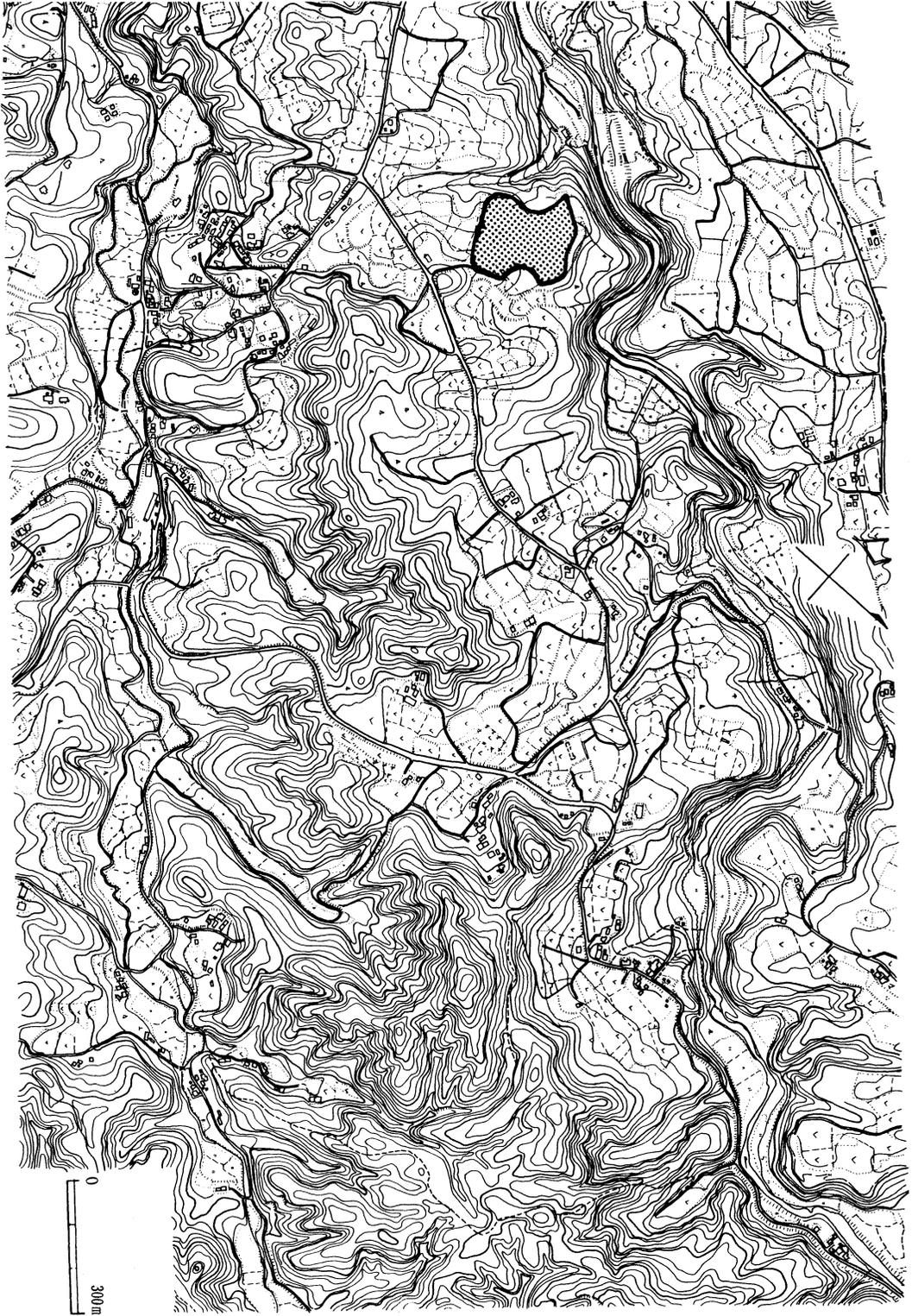
中迫遺跡には、2本のトレンチを設定し、確認を行ったが遺構、遺物は検出されなかった。

トレンチ設定以外の地点は、より以上に削平された畑であるため、遺跡の存在する可能性はきわめて小さいものといえよう。

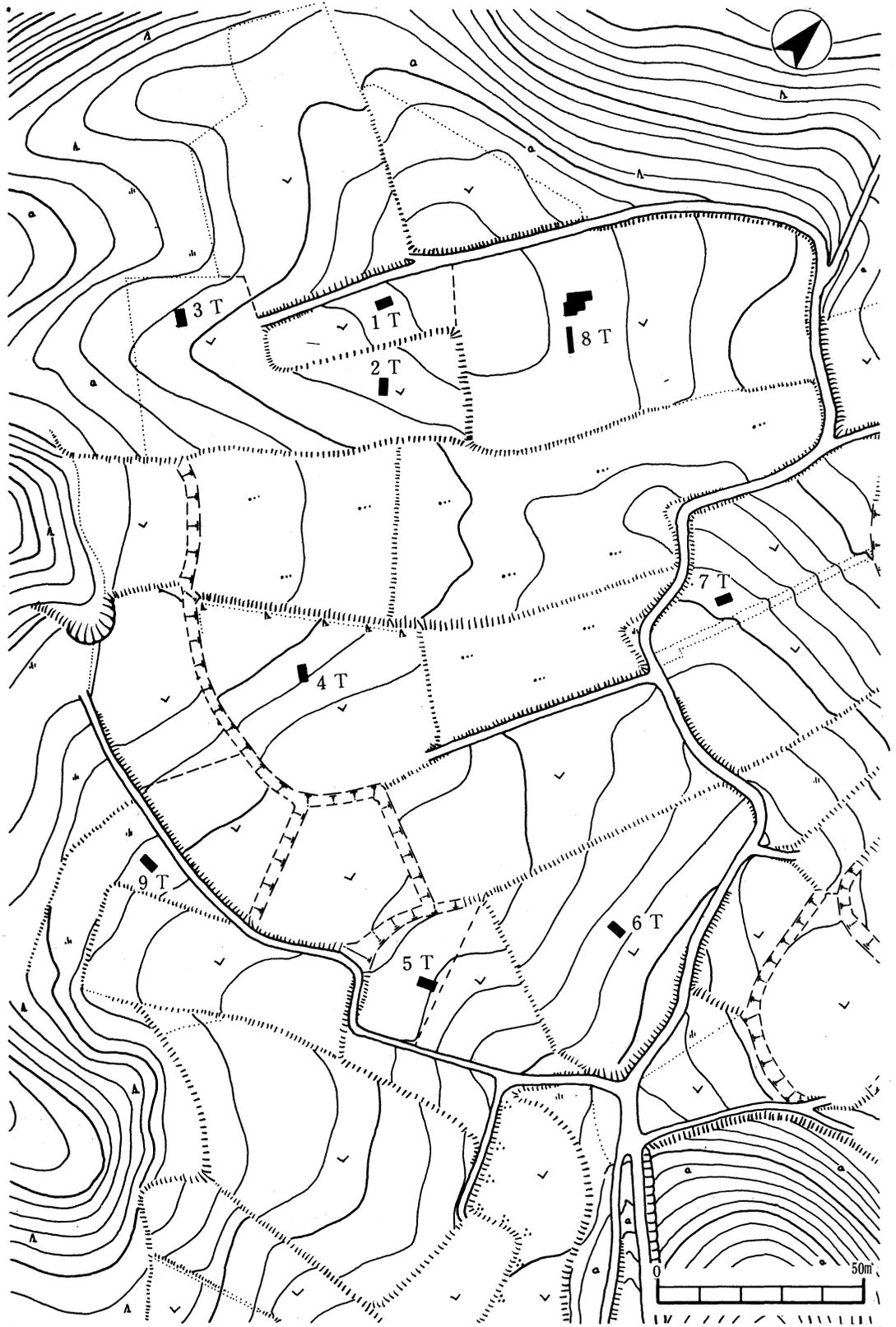


第22図 1トレンチ土層断面図

西中畑遺跡



第23图 西中畑遺跡位置图



第24図 トレンチ配置図

第1節 調査の概要 (第23, 24図, 図版11~15)

西中畑遺跡は、今回の調査区域では、最西端部に位置する。

台地は、南側が基部となり、北に面する舌状の小台地である。この台地は5トレンチを最頂部とし、6トレンチは東面する。

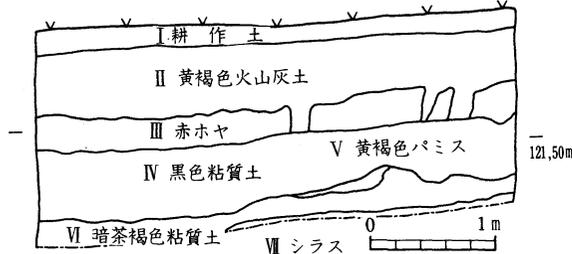
調査は、削平の少ない畑地を選び設定した。8トレンチでは、集石状の遺構を検出したのでこのトレンチに限って拡張して調査を行なった。

第2節 1, 3, 4, 5トレンチ (第25図, 図版12, 13)

1. 土層

I層は、耕作土、4トレンチでは畑地造成のため、現表土下に造成土を狭んで旧地表面を観察

1トレンチ



できる。

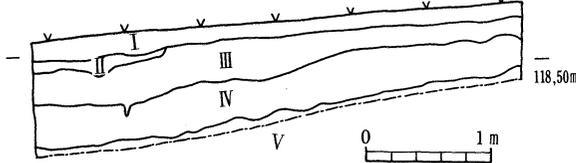
II層は、黄褐色火山灰土、通称「御池」と呼ばれる層である。層厚は10cm~60cmと場所によって堆積の差がみられる。

1トレンチでは水平であるが、他のトレンチでは傾斜に添って堆積する。

III層は赤ホヤ、IV層は黒色粘質土、V層は黄褐色パミス「サツマ」、VI層は暗茶褐色粘質土、VII層が基盤のシラス層である。

これらの層も傾斜に添って堆積する。

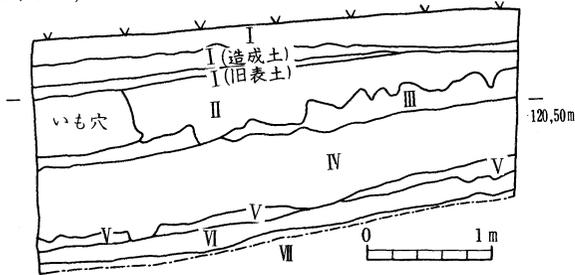
3トレンチ



2. 遺物

これらのトレンチからは遺物は全く出土しなかった。

4トレンチ



第3節 8トレンチ (第26~28図, 図版14, 15)

1. 土層

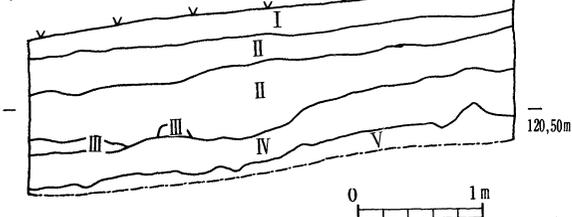
このトレンチの層位は、他のトレンチの基本的層位と一致する。

2. 遺構

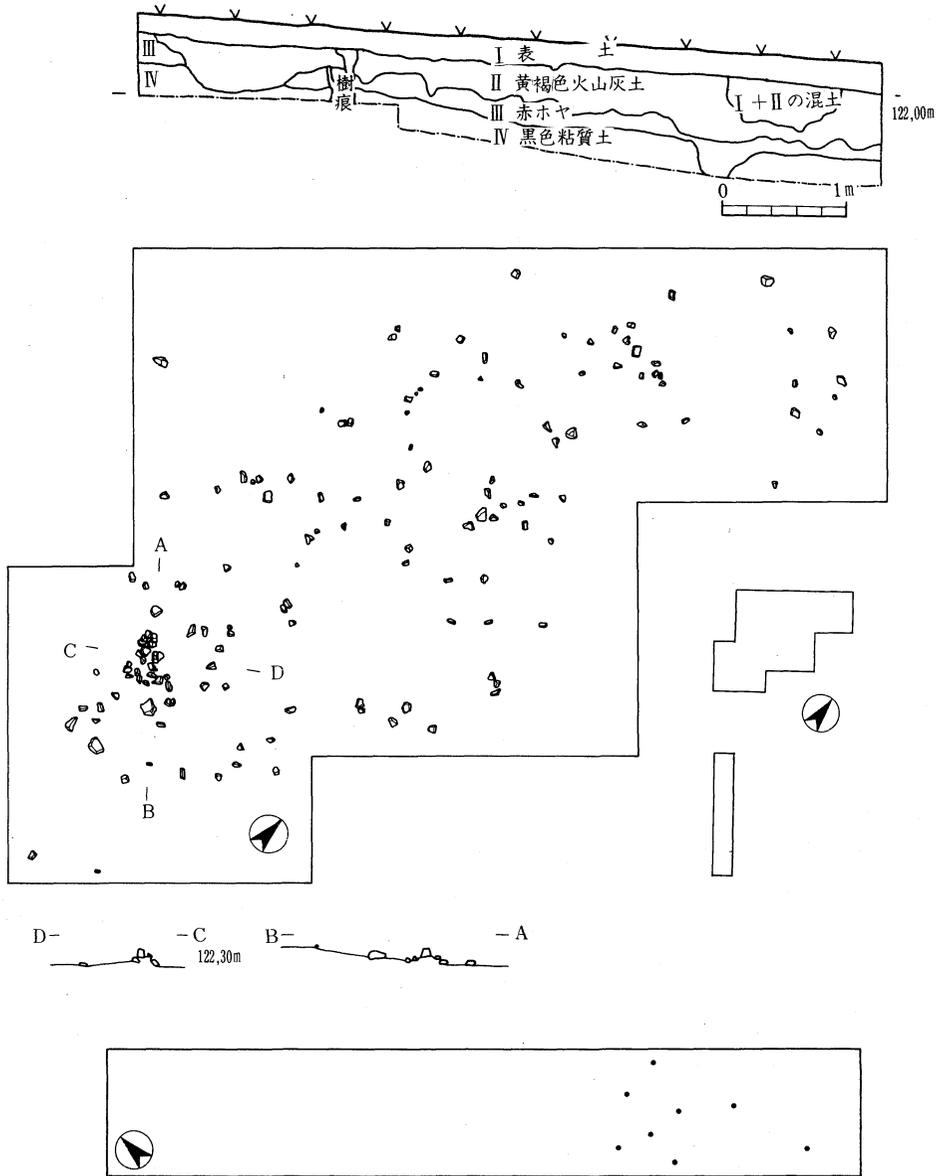
IV層中に、角礫が散在して検出されたため拡張して調査を進めた。

その結果、トレンチの西端に安山岩質の角礫約40個が集中し、週辺にも拳大ほどの角礫が散在していた。

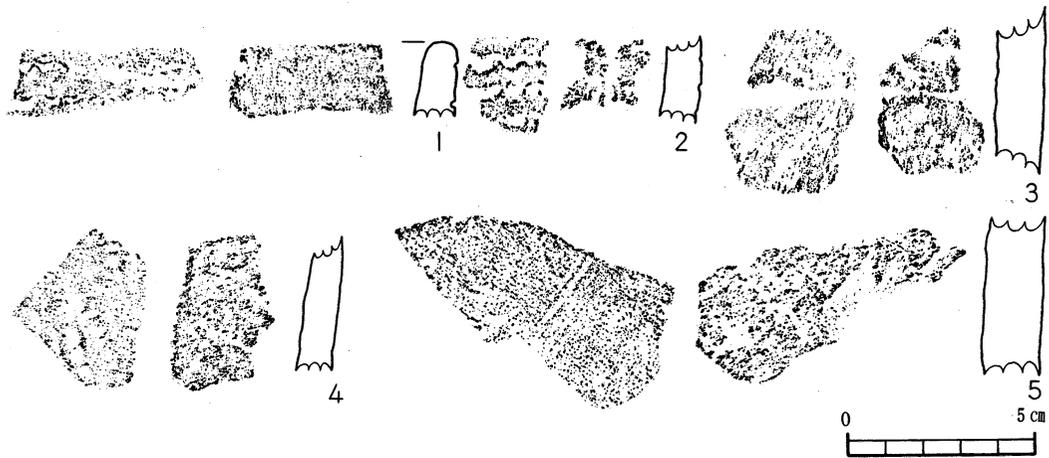
5トレンチ



第25図 1, 3~5土層断面図



第26図 8トレンチ土層断面, 遺構, 遺物分布図



第27図 出土土器実測図

2. 遺物

遺物も集石遺構同様、IV層に出土した。

1～5とも茶褐色を呈する円筒形の土器で

1～3には貝殻圧痕文を施文する。

縄文時代早期の石坂式に近い土器であろう。

6は、砂岩質の叩石である。

第4節 9トレンチ (第29図)

9トレンチは、本遺跡南端部で、調査の結果遺構、遺物は出土しなかった。土層は図示するように、黄褐色火山灰土はすでに削平されて消滅していた。

第5節 その他のトレンチ

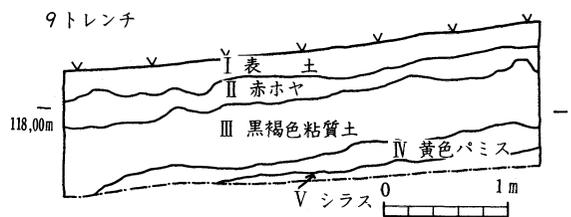
2, 6, 7トレンチとも遺構、遺物の出土はなかった。

第6節 まとめ

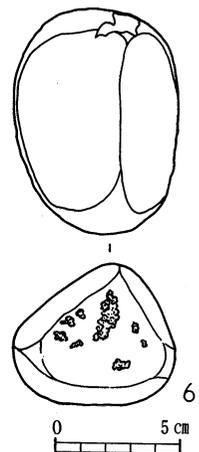
西中畑遺跡では、9ヶ所のトレンチを設定し調査を行なったところ、8トレンチのIV層で、縄文早期該当といわれる石坂式に近い円筒形土器とこれに伴うと考えられる集石遺構を検出することができた。

ただ、今回の調査は確認調査のため、性格付け等については今後にまたねばならない。

なお、集石を含む遺跡の範囲は、1, 2トレンチでは、遺構、遺物とも皆無であり、東西は削平及び谷となることから、8トレンチを中心とした約 $5,000\text{m}^2$ の範囲が推定される。

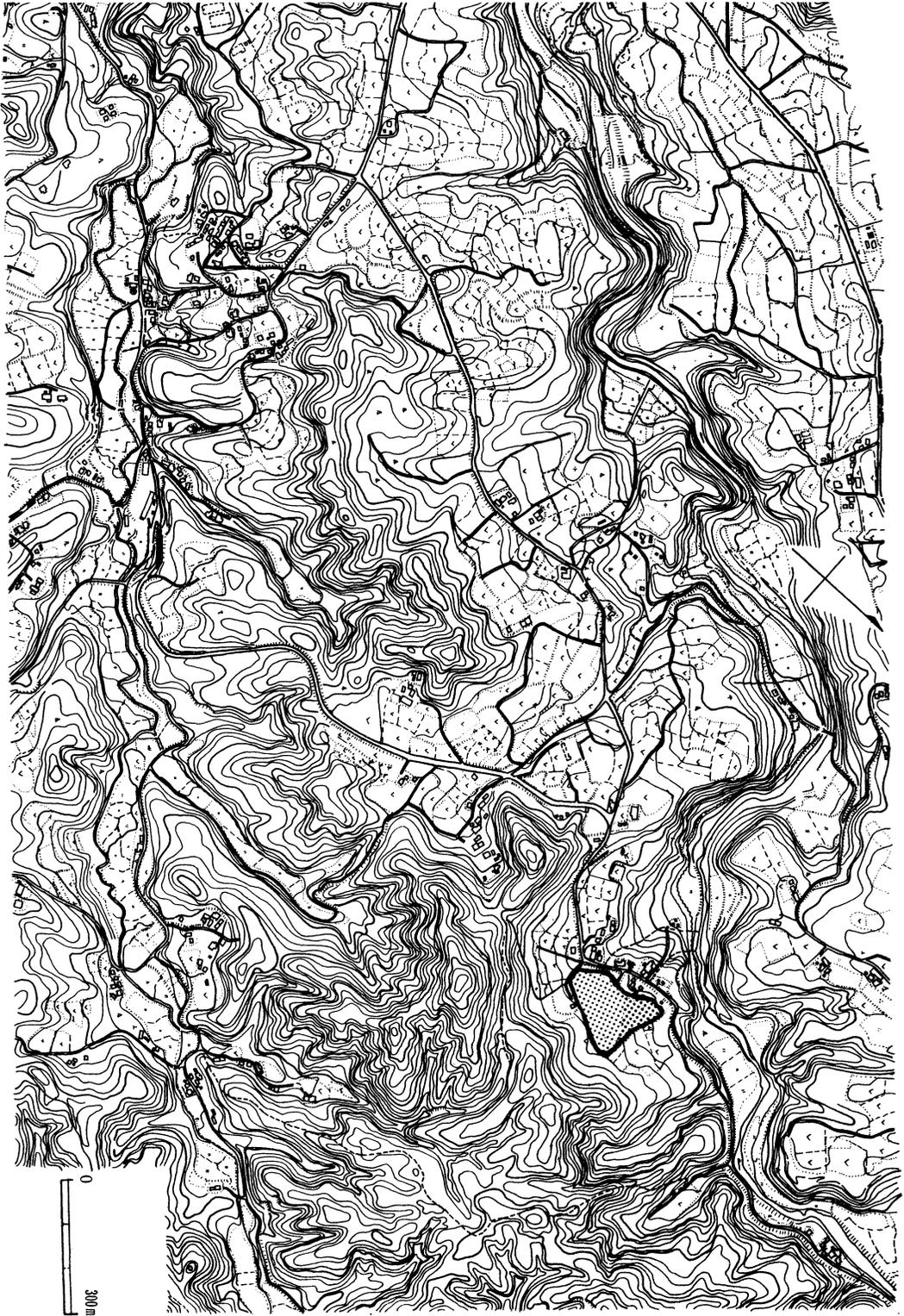


第29図 9トレンチ土層断面図

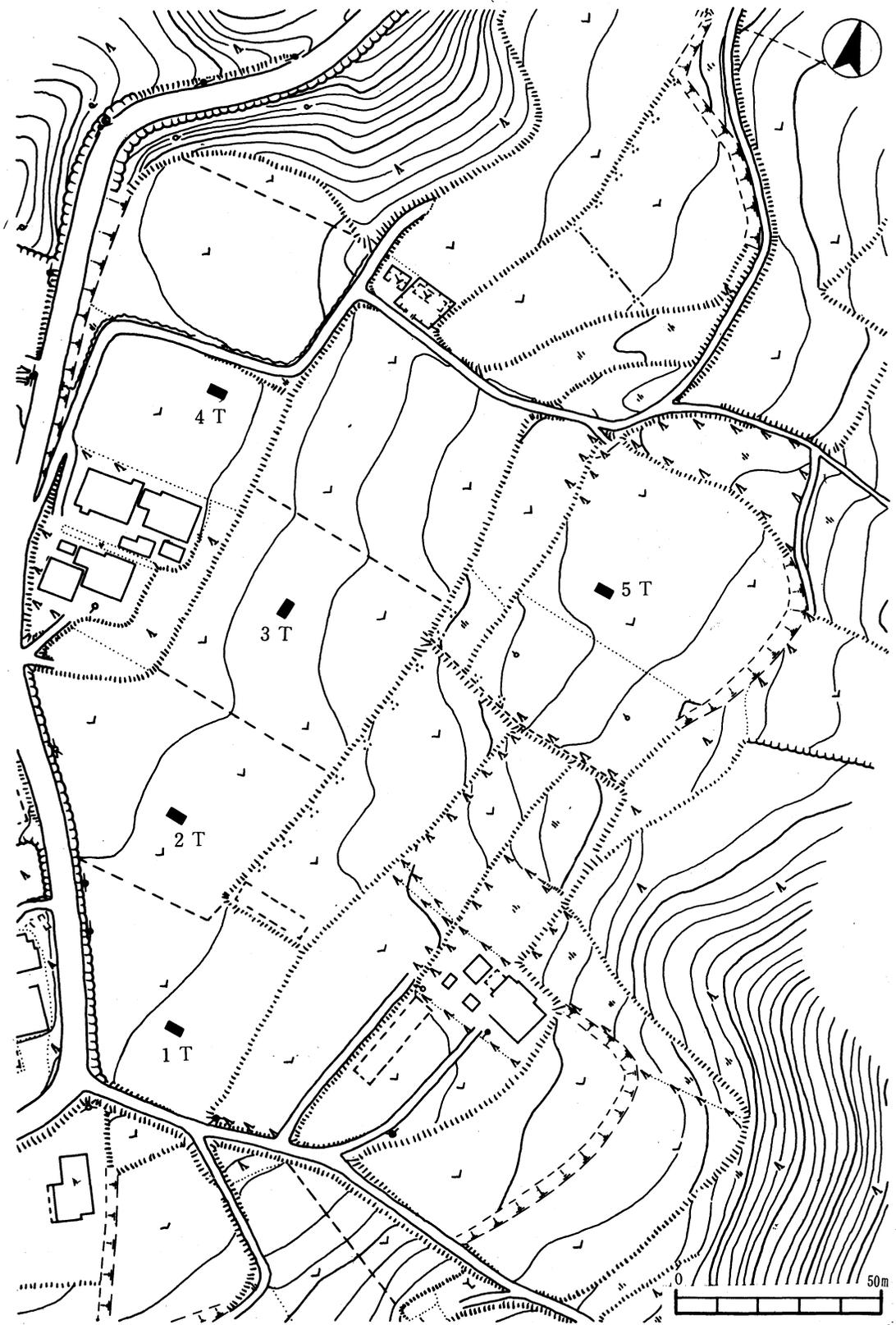


第28図 出土石器実測図

小迫遺跡



第30图 小迫遺跡位置图



第31図 トレンチ配置図

第1節 調査の概要 (第30図, 31図, 図版16~21)

小迫遺跡は県道南之郷～志布志線が山久保集落で大きくカーブし、ゆるやかな下り坂となり小迫集落へ至る、集落入口の東側の道路より一段高い畑に位置している。

遺跡の東側に位置する標高約200 mの山塊は遺跡付近でややゆるやかな傾斜となり、遺跡を含むわずかな面積の台地を形成し、さらに西側へ延びて急崖となり、下を流れる安楽川へと連なる。

このような地形のため遺跡は段々畑の中にあり、その中心と考えられる地点の標高は約126mである。

トレンチは比較的残りのよきような地点を選んで2×4mの大ききで5ヶ所に設定した。ここでは遺物が出土した1～3トレンチについて記述する。

第2節 1トレンチ (第32, 33, 37, 図, 図版17, 20, 21)

1. 土層

土層はわずかに東西に傾斜して、南北はほぼ水平になっている。

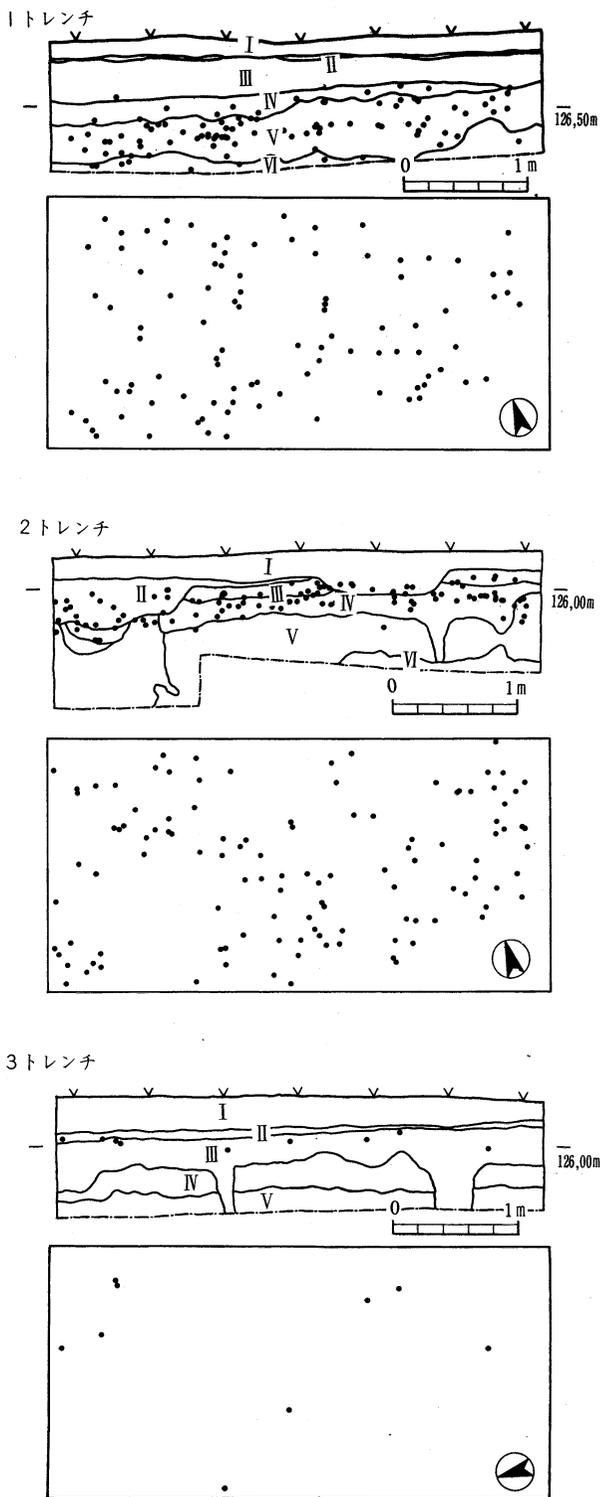
I層は現在の耕作土で約10~20cmの厚さである。

II層は大正3年に爆発した桜島の火山灰と考えられるもので灰白色である。

III層は淡黒色を呈しており、その厚さは20~30cmである。

IV層は黒色土であり、トレンチの西側にはみられないが傾斜に従って厚くなり西側では約20cmである。

V層は黄褐色を呈する火山灰であり、「御池」がその噴出源といわれるもの



第32図 1～3トレンチ土層断面図・遺物出土分布図

である。30~50cmの厚さで堆積している。

Ⅵ層は明黄褐色の火山灰で「赤ホヤ」と呼ばれる層である。

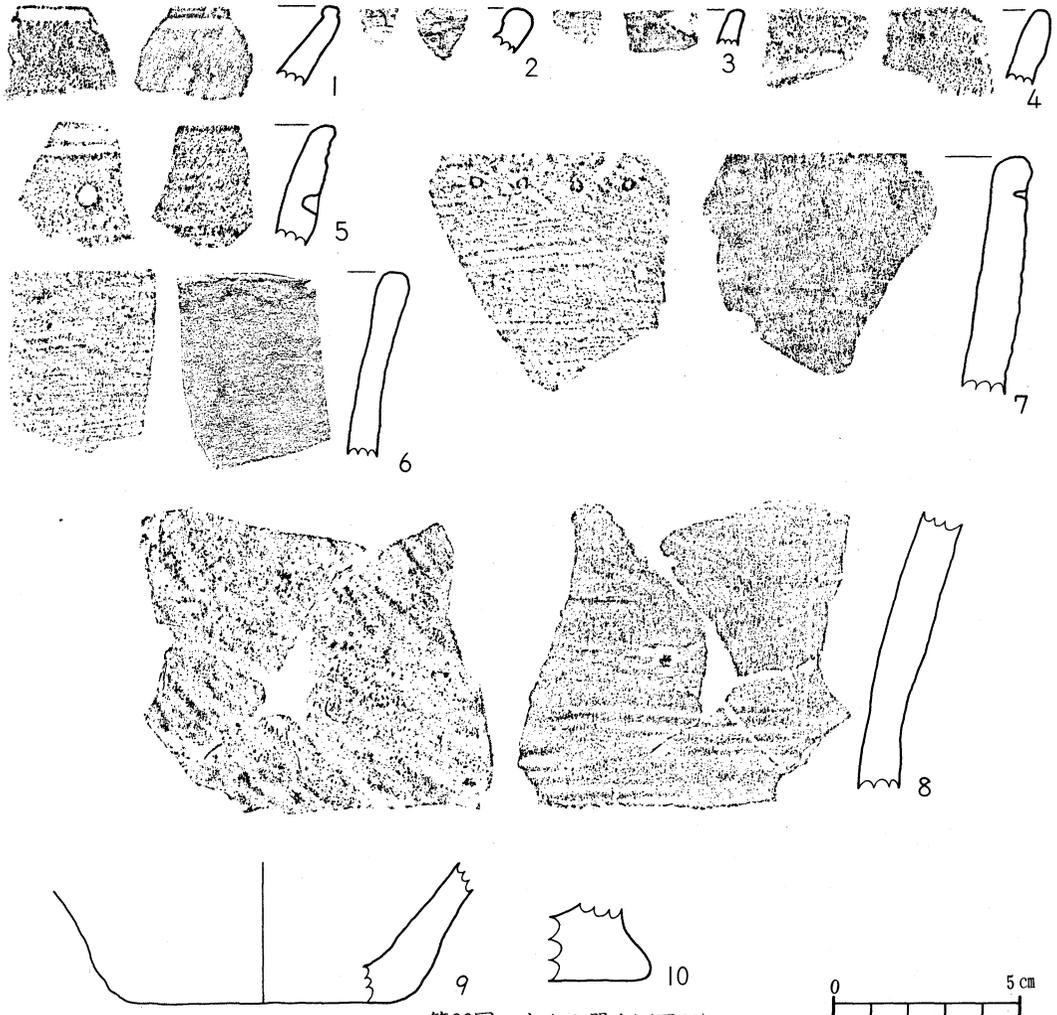
このうちⅣ~Ⅵ層に遺物が出土した。

2. 遺物

遺物はⅤ層を中心にⅣ層からⅥ層にかけて出土した。

1, 2は研磨土器の浅鉢である。1は口縁部外面に沈線を巡らし、内側に段を有するものである。2は内面に浅い沈線を巡らすものである。胎土はいずれも比較的精製された粘土を使用しているが、1はわずかに石英、角閃石を含み、2はわずかに長石を含んでいる。焼成は良好で、色調は1が淡黄褐色2が褐色を呈している。3~8は深鉢の破片である。5は口縁部に浅い沈線を巡らしており、外面には棒状のものによる刺突がみられるが内面まで貫通しない。

6は外面は条痕がみられるが、内面は条痕を施文後ナデにより消している。外面には煤の付着が



第33図 出土土器実測図(1)

みられる。7は口縁部直下に先端の鋭い細い棒状のものによる刺突連点文を施す。外面は条痕がみられるが、内面は条痕をナデにより消して整形している。外面は煤が付着している。胎土に石英、角閃石を含んでいる。焼成は良好で、色調は黄褐色を呈している。8は内外面とも条痕を施文するが、外面はあらくナデ消している。内面は上部をナデ消している。外面は煤が付着している。9、10は底部の破片である。10はは円盤はりつけのもので裾部が広がるものである。胎土に石英、細礫を含んでいる。

第37図36～39はIトレンチ出土の石器である。いずれも砂岩を素材とするもので、37が敲石で他は磨石である。磨石はいずれも半分に割れている。

第3節 2トレンチ (第2, 34, 36, 37図, 図版17～21)

1. 土層

わずかに東西に傾斜しており、樹根らしきものがみられる。

I層は耕作土で、耕作による落ち込みがみられる。厚さは約20～40cmである。

II層は黒色土である。トレンチの東側は耕作等により削平されている。西側が厚く30～40cmである。

III層は黄褐色火山灰とII層の黒色土の混じった層である。厚さは約10cm前後である。

IV層は黄褐色火山灰層である。やや粘質をおびている。10～20cmの厚さである。

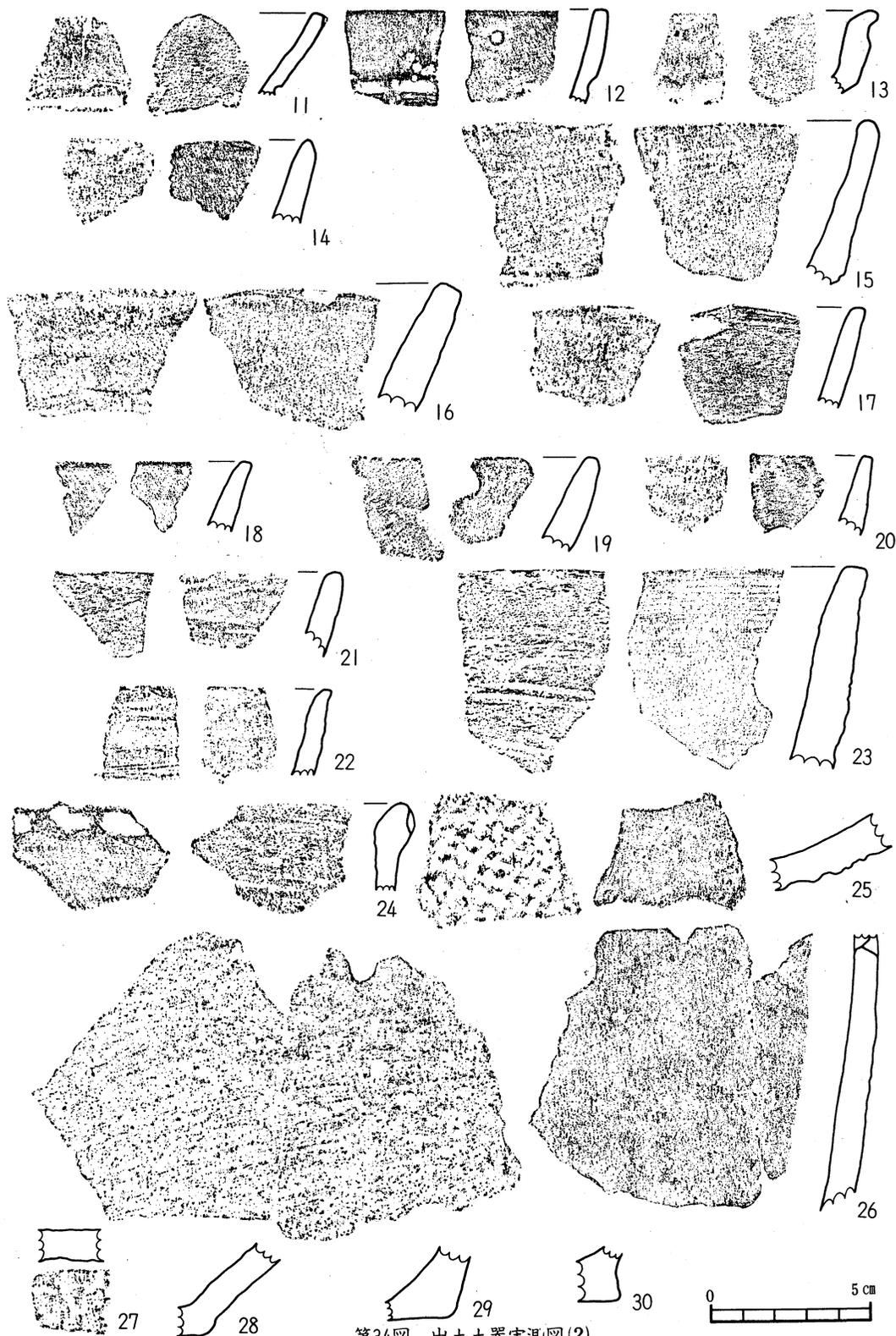
V層は黄褐色火山灰層で、「御池」がその噴出源といわれているものである。堆積が厚い。

VI層は明黄褐色火山灰層で「赤ホヤ」と呼ばれるものである。

2. 遺物

遺物は主にII～IV層にかけて出土した。第34図11～13は浅鉢である。11、12は口縁部がわずかに内湾するもので、外面に一条の沈線を巡らすもので、研磨土器である。胎土にいずれも精製された粘土を用いているが、わずかに石英、角閃石を含んでいる。焼成は良好で、色調は11が褐色12が黄褐色を呈している。13は口縁部が外反するものである。胎土に石英、長石、角閃石を含んでいる。14～26は深鉢である。14は外にはわずかに条痕がみられるが、内面にナデによる整形がなされている。口唇部が尖りぎみに丸くなっているものである。15は口唇部が丸くなり、内外面ともにわずかに条痕のみられるものである。胎土に石英、細礫を含んでおり、焼成は良好である。色調は褐色を呈している。16は口唇部が平担になる比較的厚手の土器で、内外面ともにナデ仕上げを行なっている。胎土に石英、細礫を含んでいるがややあらい。焼成は良好で、色調は黄褐色を呈している。17は内外面ともに条痕後、ナデ仕上げを行なっている土器である。胎土に石英、長石、角閃石を含んでおり、焼成は良好で、色調は褐色を呈している。

23は内外面ともに条痕を施すものであるが、一部ナデによって消されている部分もある。口唇部はほぼ平担となる。外面には煤の付着が認められる。胎土に石英、長石、雲母を含んでいる。焼成は良好で、色調は褐色を呈している。24は口縁部が外反して、肥厚し、この部分に指頭状のものによる押圧文を施すものである。内面にわずかに条痕文がみられる。胎土に石英、長石、角閃石を含んでいる。焼成は良好で、色調は黄褐色を呈している。26は外面にはややあらい条痕を施



第34图 出土土器实测图(2)

文するが、内面はナデによる整形がなされている。一箇所に焼成後、内外面あらの穿孔がみられる。外面に煤の付着がみられる。胎土に石英、長石、細礫を含んでいるがややあらい。焼成は良好で、色調は褐色を呈している。外面に煤の付着がみられる。25、27は外面に組織痕のみられる土器である。25は網目状圧痕、27は蓆目状圧痕である。いずれも胎土に石英、角閃石を含み、焼成は良好である。色調は25が褐色、27は黄褐色を呈している。28～30は底部の破片である。いずれも胎土に石英、細礫を含み、焼成は良好である。色調は黄褐色を呈している。

第36図35はチャートを素材とする石鏃である。長さ17.7mm、幅14.4mm、厚さ4.3mmで、重さは約0.9gである。第37図40は砂岩を素材とする石皿の破片である。41は頁岩を素材とする石錘で、礫の2箇所に研磨により抉りを入れているもので重さは約122gである。

第4節 3トレンチ (第32, 35, 37図, 図版18, 19, 21)

1. 土 層

わずかに南北に傾斜している。

I層は耕作土で15～30cmの厚さである。

II層は黒褐色土で北から南へ向かってゆるやかに傾斜しており南側が厚く約10cmである。

III層は黄褐色火山灰層で「御池」を噴出源とするもので約20～40cmの厚さである。

IV層は「赤ホヤ」と呼ばれる明黄褐色火山灰層である約20cm前後の厚さである。

V層は黒褐色土である。

2. 遺 物

遺物はII層からIII層にかけて出土した。第35図31は研磨された浅鉢の破片である。内外面ともに口縁部に1条の沈線を巡らしている。胎土には精製された粘土を用いているが、わずかに石英、長石を含んでいる。焼成は良好で、色調は淡褐色を呈している。32～34は深鉢の破片である。いずれも外面にわずかな条痕がみられるが、内面はナデによる仕上げを行なっている。32は外面に煤の付着がみられる。

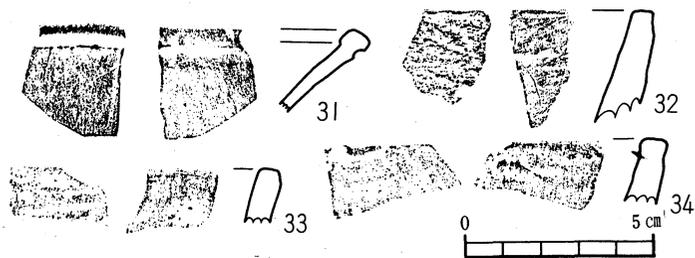
第37図42は頁岩を素材とする磨製石斧である。ほぼ全面をていねいな研磨によって仕上げている。

第5節 その他のトレンチ

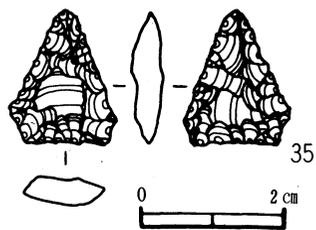
第31図に示すように小迫遺跡には5ヶ所にトレンチを設定したが、4、5トレンチには遺物は確認できなかった。

第4トレンチは1～3トレンチより約2m程低い場所にトレンチを設定した。1～3トレンチにおいて遺物包含層である黄褐色火山灰土層は耕作土下のII層に確認したが、遺物の出土は皆無であった。

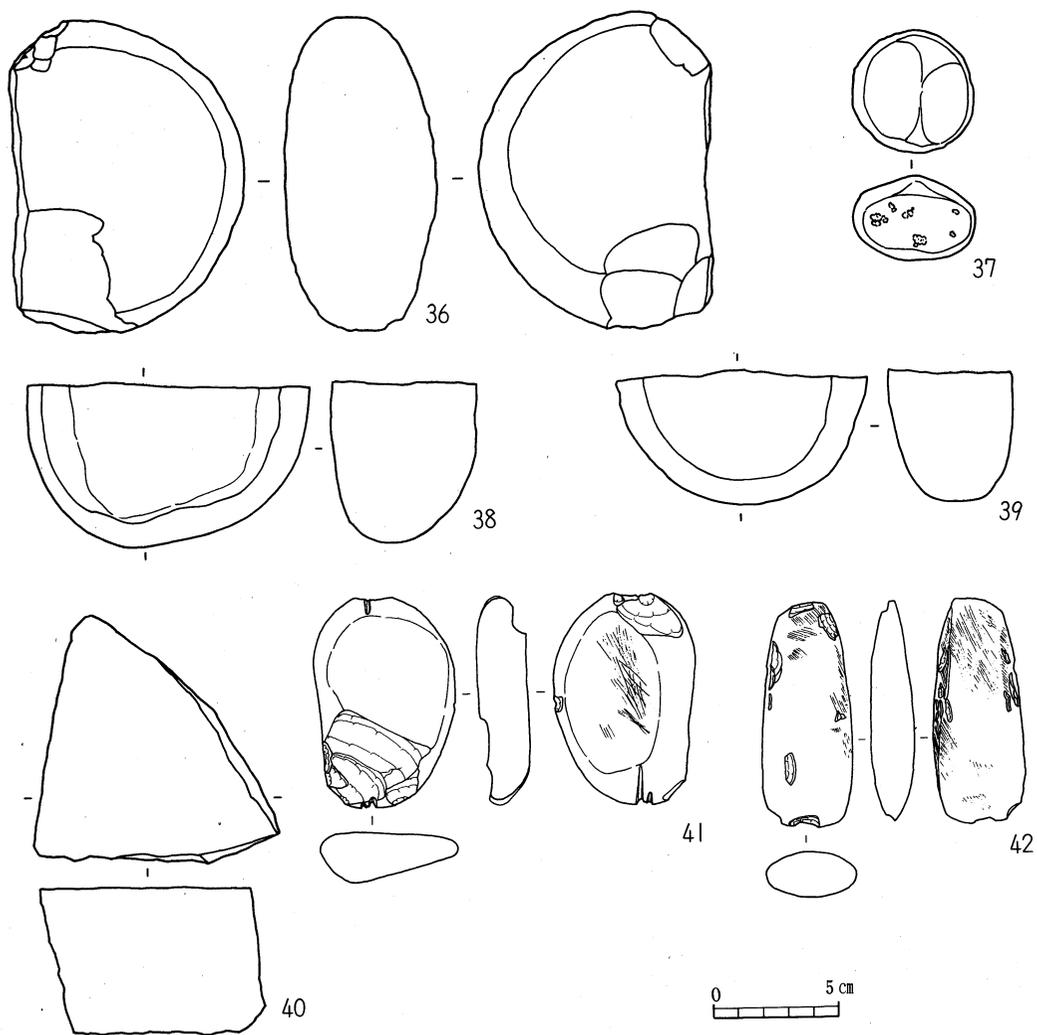
第5トレンチは1～3トレンチより約6m程高い場所に設定した。その結果包含層である黄褐色火山灰土層はわずかにみられたが、畑にする際の造成によりほとんどが削平されており、約1m程が埋土であった。第4トレンチ同様遺物は皆無であった。



第35图 出土土器实测图(3)



第36图 出土石鏃实测图



第37图 出土石器实测图

第6節 ま と め

小迫遺跡は東、南、北を山に囲まれた西向きの帯状の細長い台地に位置している。

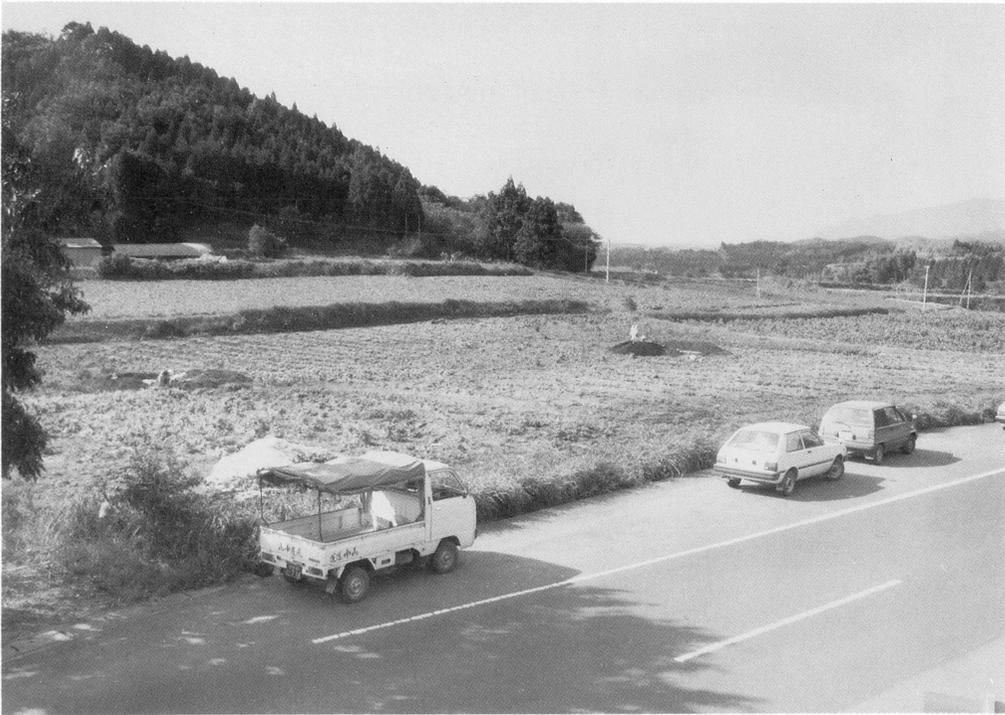
今回の調査では地形等を考慮して1～5トレンチを設定して調査を実施した。その結果1～3トレンチでは遺物包含層を確認して土器、石器等を検出した。4トレンチでは包含層に相当するとみられる層は確認したが、遺物は皆無であった。5トレンチは削平等により旧地形が変化しており、遺物等はまったくみられなかった。

この結果、遺跡の広がりには1～3トレンチを中心とする、ほぼ南北に細長くなる地域になるものと考えられる。また西側の渠道及び人家とは比高差が約3m程あり、この部分は削平されて旧地形は変化しているものと考えられる。

遺物は御池が噴出源と考えられる黄褐色火山灰土層を中心にして、その上位の黒褐色土層と下位の赤ホヤ層に一部出土した。

時期は縄文晩期の黒川式に相当する浅鉢、深鉢がほとんどである。しかし第33図7に示すような内面は条痕後ナデ仕上げを行い、外面は条痕を施文し、口縁上部に先端の尖ったものの刺突により連点文を施すものがある。また底部も同図9のように黒川式のものとしては若干異質なものとも考えられるものもあるが、今後の類例の増加にまちたい。

版 图



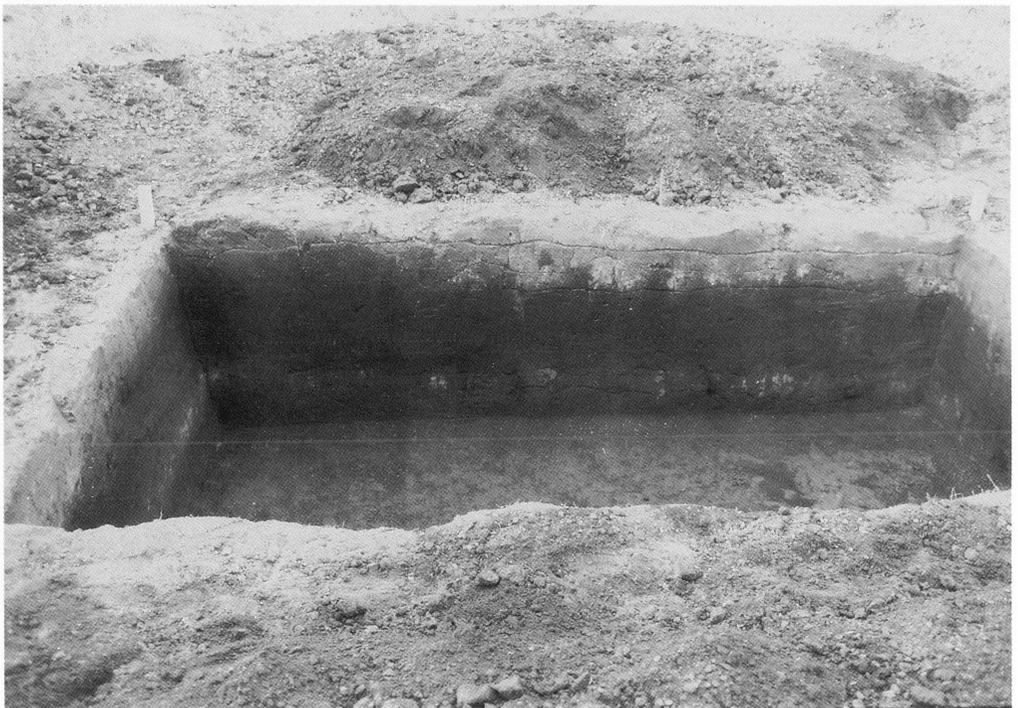
山久保 A 遺跡近景



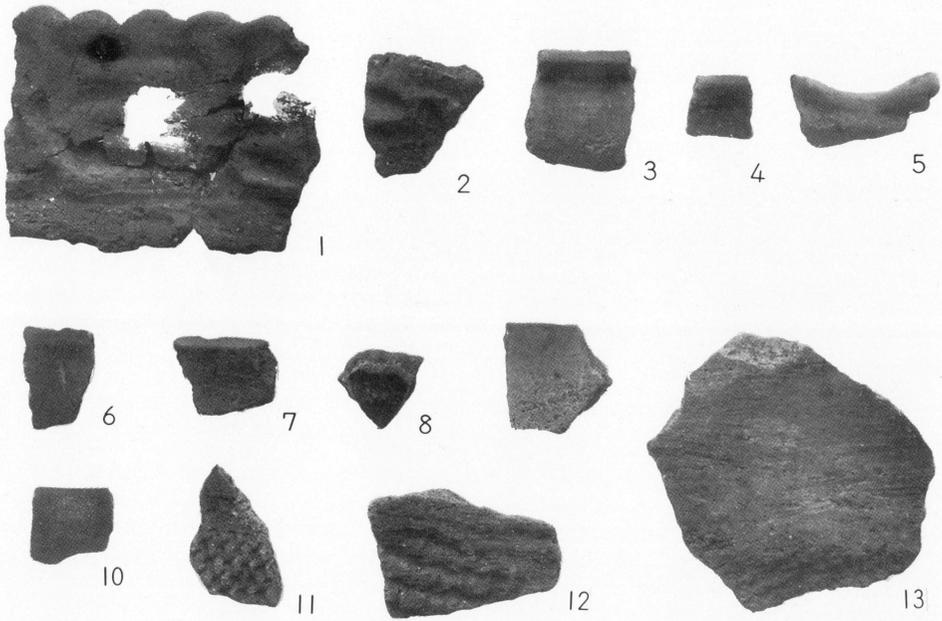
I トレンチ土層断面



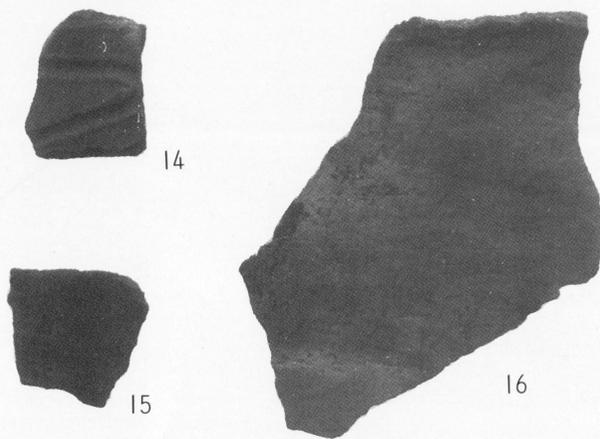
1 トレンチ遺物出土状況



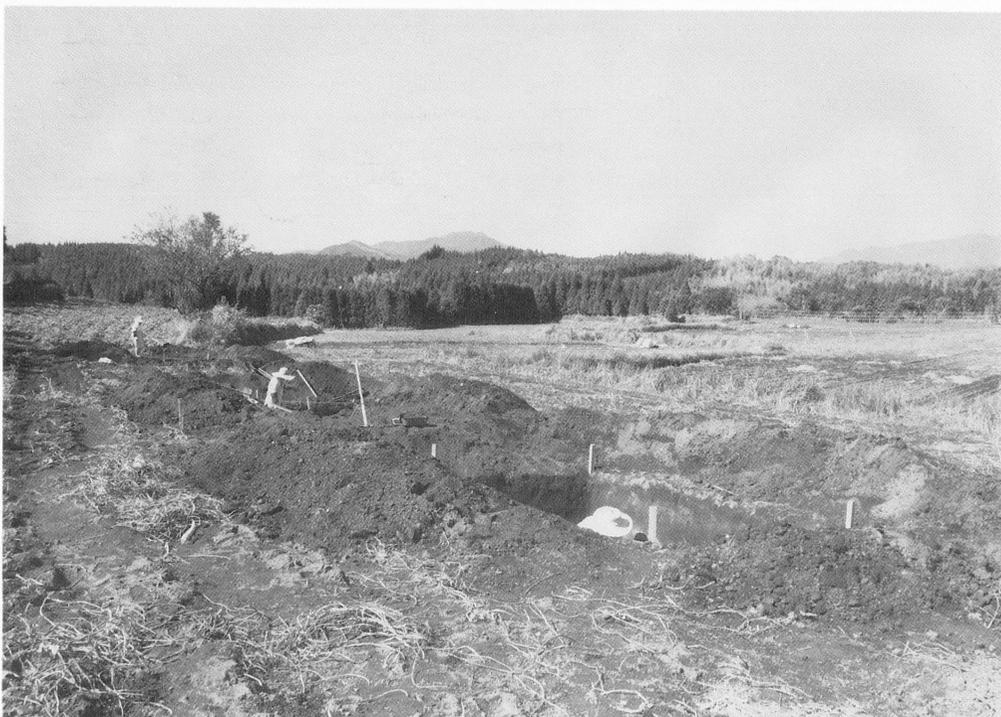
6 トレンチ土層断面



出土土器 1~13—1トレンチ



出土土器 14, 15—5トレンチ
16—2トレンチ



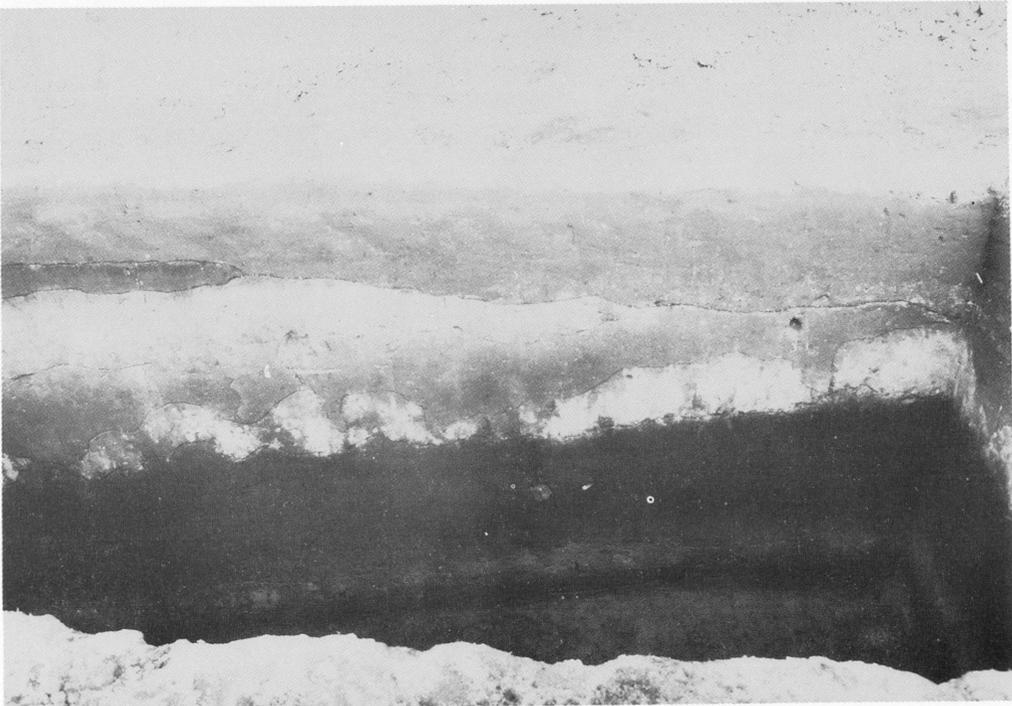
山久保遺跡 B 近景



I トレンチ土層断面



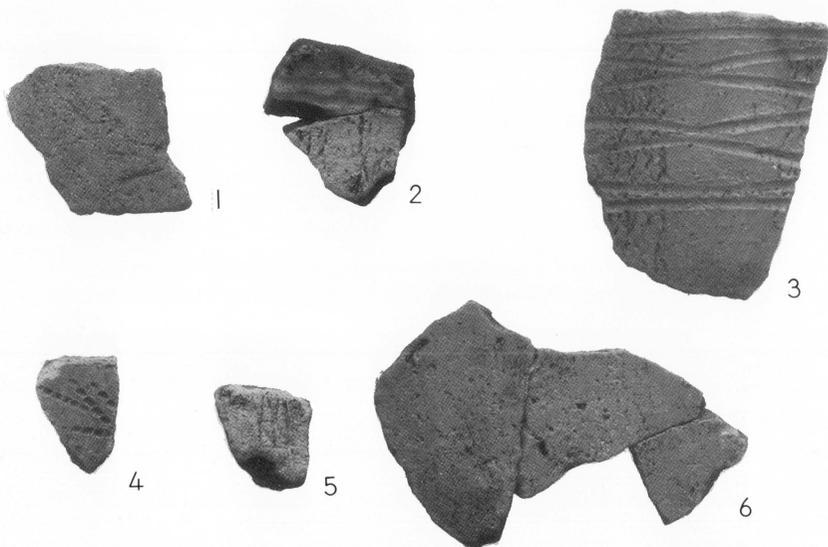
4トレンチ断面



6トレンチ断面



8トレンチ土層断面



出土土器 (8トレンチ)



蔵園遺跡近景



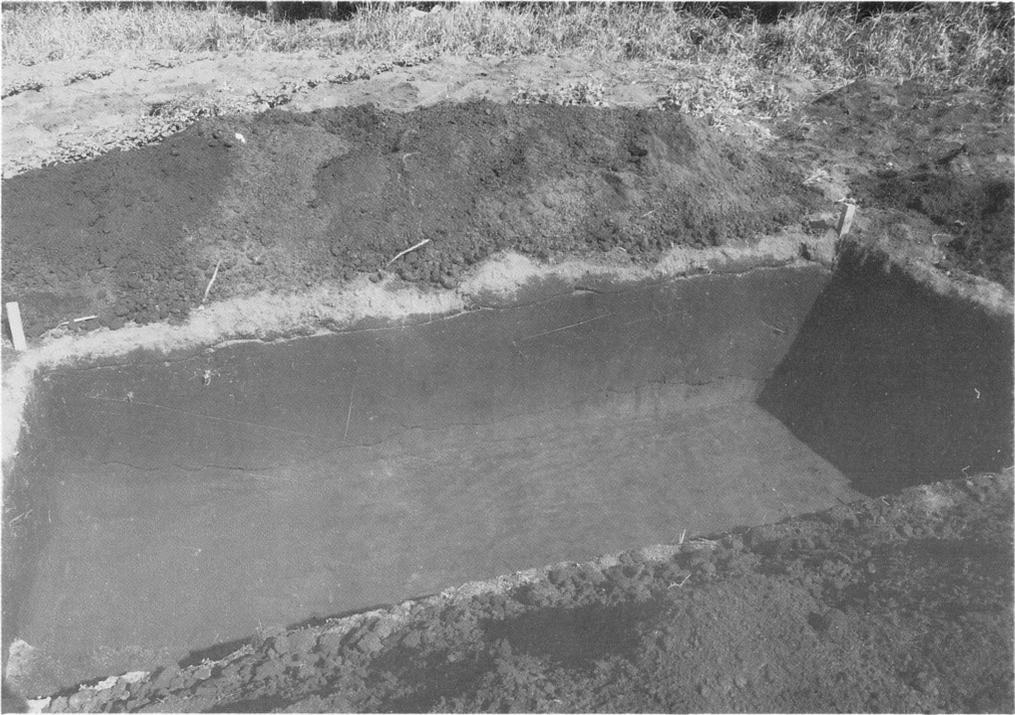
7トレンチより山久保B遺跡を望む



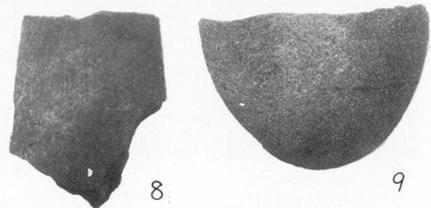
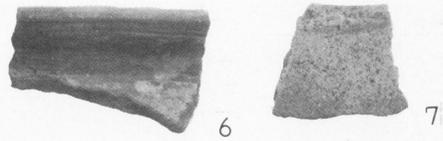
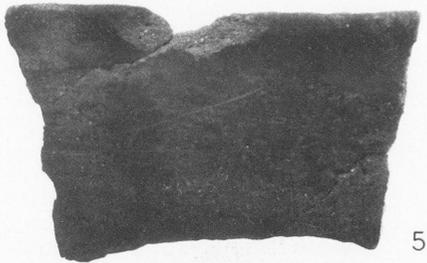
1 トレンチ土層断面



4 トレンチ土層断面



5トレンチ土層断面



出土土器・石器
1~5—1トレンチ
6, 7—3トレンチ
8, 9—1トレンチ



中迫遺跡遠景



Iトレンチ土層断面



西中畑遺跡遠景



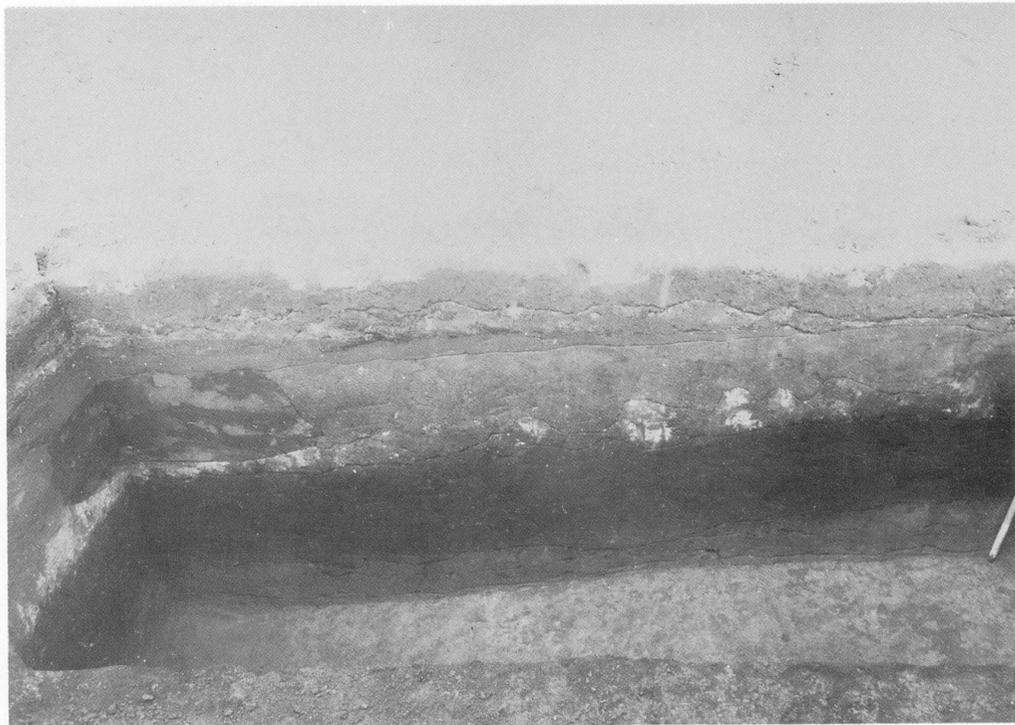
発掘風景



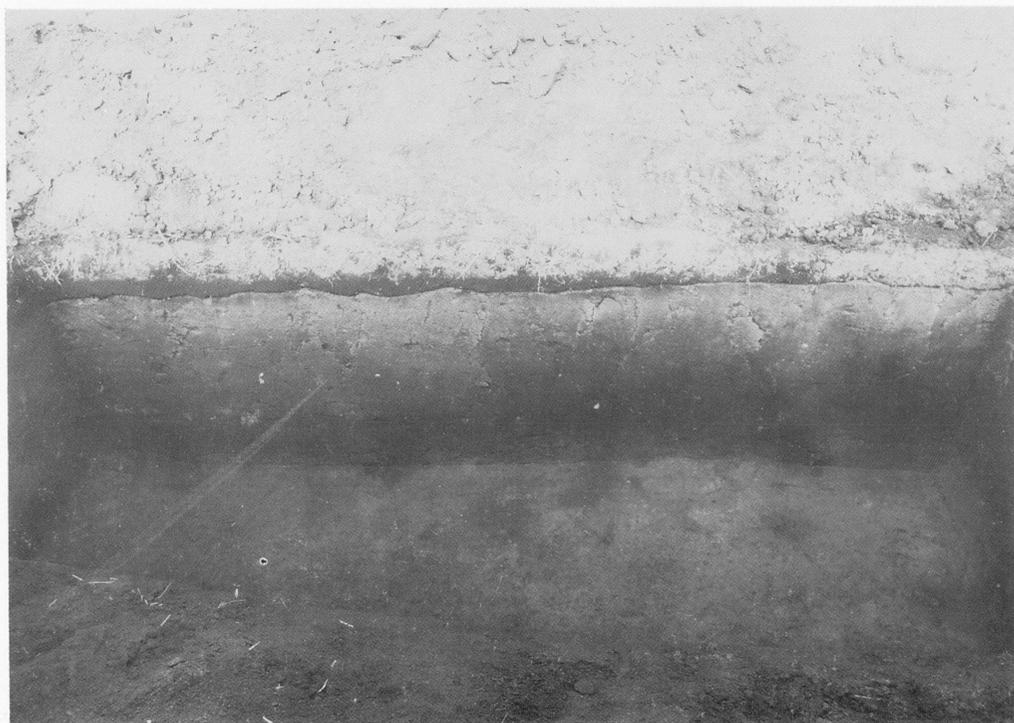
1 トレンチ土層断面



3 トレンチ土層断面



4 トレンチ土層断面



5 トレンチ土層断面



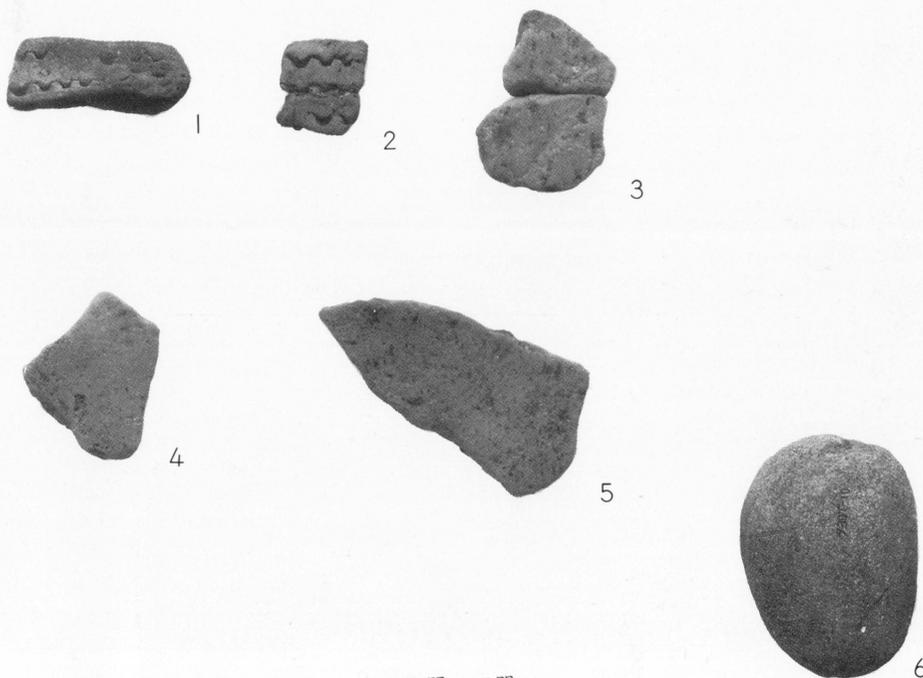
8トレンチ土層断面



8トレンチ土器・集石出土状況



8トレンチ集石出土状況



出土土器・石器



小迫遺跡遠景



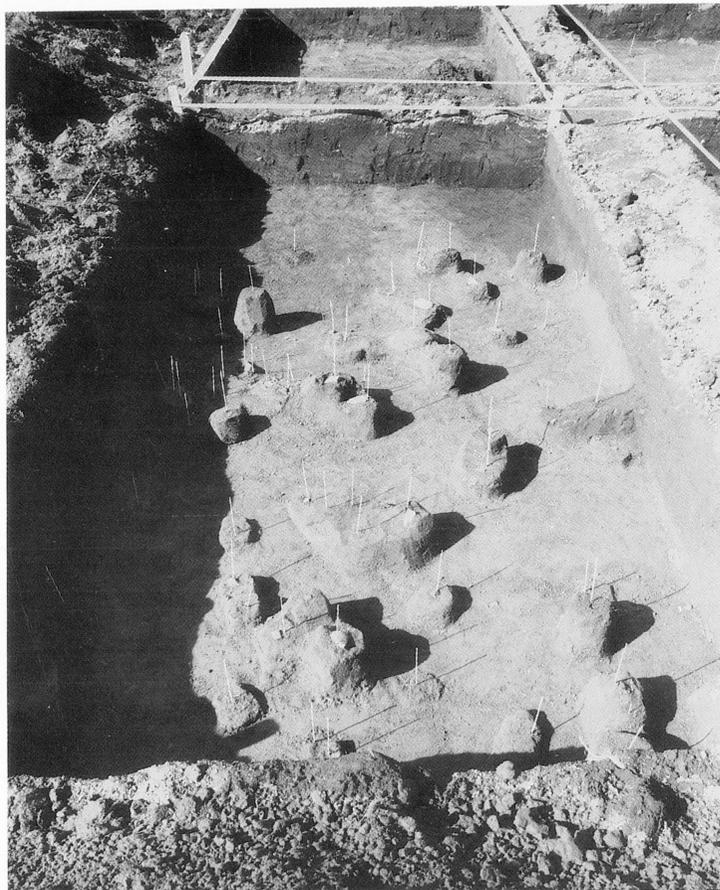
小迫遺跡近景



1 トレンチ土層断面



2 トレンチ土層断面



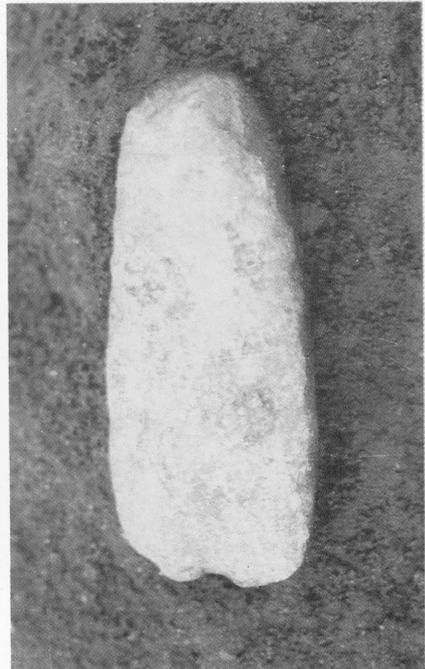
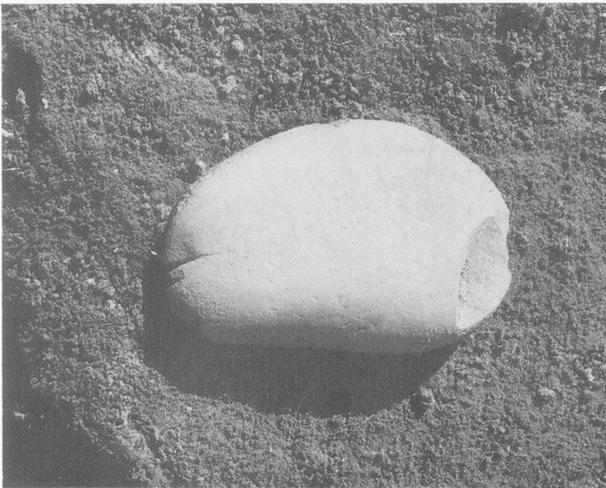
2
トレンチ遺物出土状況



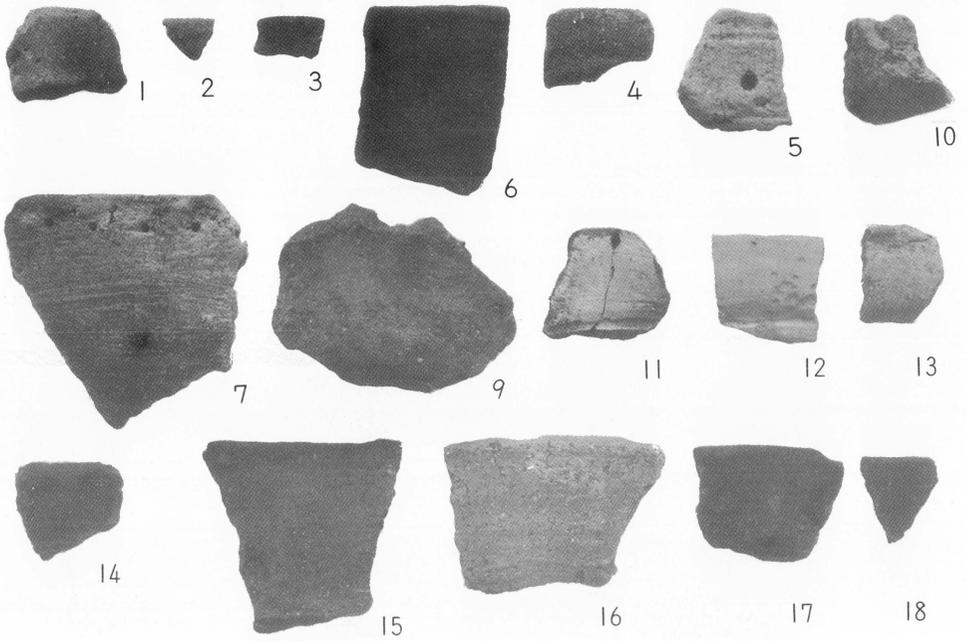
3 トレンチ土層断面



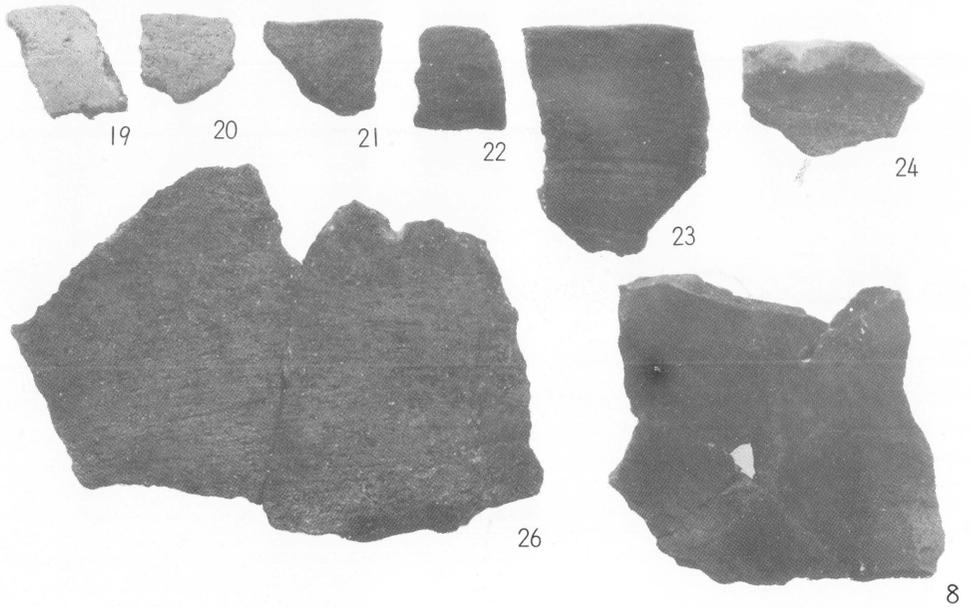
4トレンチ土層断面



2, 3トレンチ石器出土状況



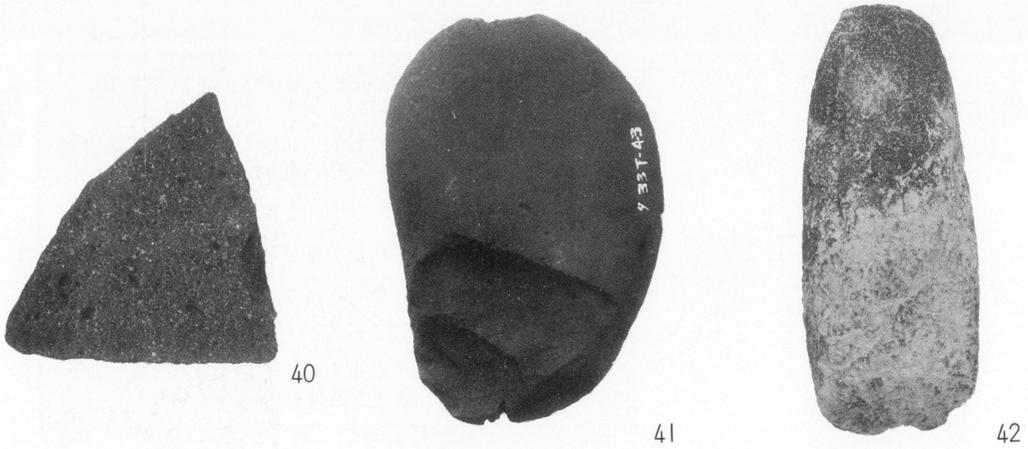
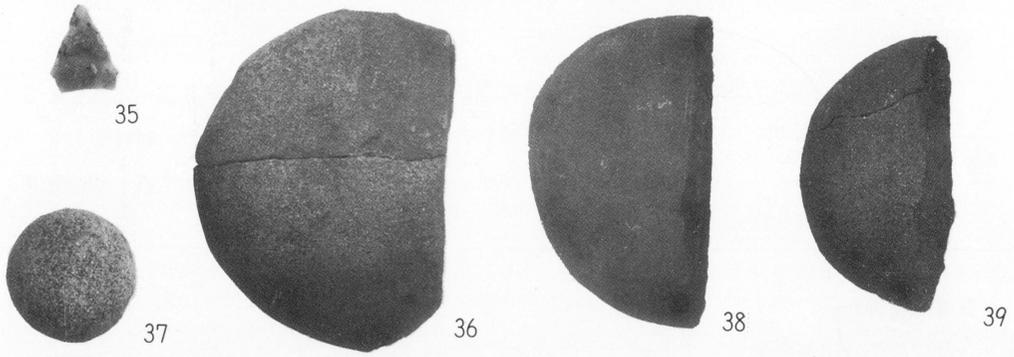
出土土器 1~10—1トレンチ
11~18—2トレンチ



出土土器 8 —1トレンチ
19~26—2トレンチ



出土土器 27~30—2トレンチ
31~34—3トレンチ



出土石器 36~39—1トレンチ
35, 40, 41—2トレンチ 42—3トレンチ

あ と が き

点在する5遺跡の調査は、ジブシーのようであった。しかも各遺跡のトレンチにおける遺物の出土状態にはばらつきがあり、緊張を持続させるのもなかなかであった。

このような発掘調査であったが、トレンチを設定する畑の地主さん方は、心よく承諾をくださり、スムーズにトレンチ設定、発掘、埋戻しと一連の作業を続けることができた。

発掘作業に従事された地元の方々も、作業にも次第に馴れ、考古学にも興味と関心をいだかれるまでとなった。食べられぬと考えていたドングリはついにだんごとなって皆の口には入った。古代の食物を作り出すことで、今、古代を自分たちのところへひき寄せたことにもなった楽しいコマであった。

最後に、発掘作業に従事して下さった皆さん、迷惑にもかかわらず心よく掘らして下さった地主の方々、整理作業を担当していただいた県文化課収蔵庫の皆さんに、心から感謝を申し上げます。

発掘作業員

水流トシ子 水流ミホ子 重森サキエ 重森春江 井久保カスミ 井久保芳江 高松ミモリ
又木スズ子 園田カミヨ 小迫チサ子 村留芳香 春口フミエ 河野八千代 新村チエ子
上迫モミ 永吉ノリ 牟田島昭子 山中ミホ子 山中節子 浜平民子 倉橋忠義 西田正善
春口峯次 森村和裕

整理作業員

野口久子 川畑恵子

志布志埋蔵文化財発掘調査報告書(11)

山久保A遺跡・山久保B遺跡・蔵園遺跡
中迫遺跡・西中畑遺跡・小迫遺跡

発行日 昭和61年3月

発行 志布志町教育委員会
〒899-71 曾於郡志布志町志布志2542

印刷所 (有)志布志新生社印刷
鹿児島県曾於郡志布志町